
魔法少女リリカルなのは～天を穿つ深緑の狙撃手～

サラマンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜天を穿つ深緑の狙撃手〜

【コード】

N5007I

【作者名】

サラマンド

【あらすじ】

戦場に散った深緑の狙撃手、彼は世界を越え、ミッドチルダへと降り立つ。

己の因果に決着を着け、自らに変革をもたらすために

魔法少女リリカルなのはStrikersxガンダム00のクロスオーバー小説です。

主人公はロックオン・ストラトス（ニール・ディランディ）です。

ブローグ 終わりは始まり(前書き)

2011年6月7日 加筆修正

プロローグ 終わりは始まり

プロローグ 終わりは始まり

真っ暗だ…。

何も見えない…。

何も聞こえない。

俺は確かにあの時、爆発に巻き込まれて死んだ。

復讐に走り、家族を思い、仲間を思いながら死んだ。

だが俺は生きていた。体の重みを感じている

…目を開けたら白い天井がまず目に入った。

どういふことなのかは不明だが、どうやら病院にいるようだ。

意識がはつきりして段々と感覚が戻ってきたところで、ドアから一人、亜麻色の髪をポニーテールのように左にまとめた女性が入ってきた。

「あつ、気が付いたんですね。」

「あんたは？」

「私は時空管理局・教導官・高町　なのはって言います。貴方の名前は？」

「俺の名は…。」

俺は名前を言うのを躊躇った。彼女が着ているものはおそらく軍人の制服なのだろう。時空管理局も名前の通りで軍と同じような組織なのだろう。

ユニオン、人革連、AEUでもないが警戒するに越したことはない

…。

「あの…失礼ですが、貴方の手持ちにIDカードらしきものがあつたので拝見させてもらいました。」

本当のところは睨む所だが、逆に警戒されかねないため黙って聞くに徹する。

「勝手ながら見せてもらいましたが、ソレスタルビーイングという組織のロックオン・ストラトスさんでいいんですか？」

…何かおかしい。

「確かに名前は合っているが、どういうことだ？世界中でその組織名は知らないはずなのに…。」

「…ソレスタルビーイングなんて地球でもどの世界でも聞きませんよ。」

「！？そんな馬鹿な…。」

ソレスタルビーイングなんて聞いたら誰でも独房入りなり尋問なりをするはずだ。なのにそれをするような気配はない。つまり…別世界だということのか？

「ここは地球なのか？」

推測が当たっているかどうかの確認の為に聞く。

「ううん。ここはミッドチルダですよ。…なら、貴方は地球出身なんですか？」

案の定、答えは想像通りだった。

じゃあ、俺はあの宙域からここに来たってののか？

…信じられない。

それよりも彼女の質問に答えなくては…。

「そうだ。俺はアイルランド出身だ。聞いたところ、あんたは日本生まれのようだが…。」

「はい、そうです。…で、もう一つ聞いてもいいですか？」

「何だ？」

「…ソレスタルビーイングという組織は何をしているんですか？」

「…戦争根絶。あらゆる紛争や戦争に武力介入する。俺は実際に色んな所に武力介入した。内容によっては宇宙でも戦闘になった。」

下手に嘘を言っでは今後行動するにしてもまずいため、素直に答える。

「宇宙！？私を知る限りでは宇宙で戦闘なんて地球ではまだそんな

ことは起きてませんよ！それに、そうなったら管理局が見逃しませんよ！？」

…待て、おかしい。

明らかに噛み合っていない。

「…今は西暦2308年じゃないのか？」

「…違います。…まさか。」

もう間違いない。俺は…平行世界に来ちゃったんだ。

「冗談だろ？生きてると思ったら全くの別世界って…。」

生きていても、もうあいつらと共に戦うことが出来ないじゃねえか…！

「ロックオンさん…。」

そうだとしたら、あいつらはどうなったのかも確かめようがない。

だがそれ以前に、俺はあつちでは死んだ身だ。死人がノコノコ出てくるものじゃない。

なら…

俺はこの世界で自分の出来ることをやるだけだ!!

「…なのはって言ったよな。」

「はい。」

「時空管理局つてのには入れんのか？」

「え、でも…座標が分かれば貴方の世界に帰ることも…。」

面食らうのはだが、こっちにとって今後の行動指針になることだから答えてもらわなくてはいけない。

「あつちではもう俺は死んだ身だ。死人がノコノコ出てくるものじゃない。俺がこっちに飛ばされたあとがどうなったかは気にはなるが…。」

トレミーのクルーの皆は無事なのか

ティエリアは大丈夫なのか

アレルヤは最後まで抗えたか

刹那は答えを出せたのか

気になることは山程ある。

「ただ、俺たちは既に咎を受けるべき人間。そんなことを知るべきじゃないのかもしれない。」

「それに、過去の清算は終わった。」

「なら、もうここで新たな人生を歩んでもいいかもしれない。」

「本当に、いいんですね？」

「ああ、もう決めたからな。」

「そうだ、ロックオン・ストラトスは元々ソレスタルビーイング内でのコードネームだ。だったらここは本名に戻った方がいいのかもしれない。」

「なら私のことはなの呼んでください。」

「ああ、分かった。あと、あんたも敬語じゃなくていいからな。それに、ロックオン・ストラトスは本名じゃない。」

「そうなんですか？」

「ああ、俺の本名は……」

ニール・ディランデイだ。

この日がニール・ディランデイの新たな人生、
管理局員としての人生の始まりだった

プロローグ 終わりは始まり（後書き）

すみません、編集の仕方に戸惑ってあらずじと目次を間違えてしまいました。

では改めて…

初めまして、そして気付いた方こんにちは。

サラマンドです。

ここではそう呼びください。

このクロスオーバー小説は私が運営しているサイトから引っ張り出した小説です。

始まりはStrikers本編から3年前で、スバルとティアナが訓練校に入る4ヶ月前です。

一見ミスマッチかもしれませんが、よろしければ最後までお付き合い合
い下さればと思います。

ではよろしく願いします。

第1話 ニールのデバイス（前書き）

早速、第一話を更新しました。

結構ページがある…かもしれない。

2011年6月7日 加筆修正

第1話 ニールのデバイス

「それでなんですけど、実は貴方が倒れていたところでこんなものが落ちていたんです。」

なのはは上着のポケットに手をつ込み、そこからブレスレットを取り出した。

基本的に深緑だが、金色のラインが二本入っており、水色のアクアマリンのような丸い宝石が白い円の枠によって嵌め込まれていた。

「？俺はこんなもの知らないぞ。」

だが、どうもデュナメスのような感じがする。深緑は俺の母国のナショナルカラー、金色のラインは色は黄色だがおそらくデュナメスのアンテナ類、アクアマリンの丸い宝石のようなものは狙撃用カメラアイに似ている。

>初めまして、マスター。 <

突然、宝石の部分が点滅してそこから声がした。

しかも声はフェルトを思わせるような感じだ。

「な、何だあ!？」

俺はびっくりして思わず素っ頓狂な声を出して後ろに下がった。

> 私はガンダムデュナメスだったものです。 <

「インテリジェントデバイスだったの!？」

なのはも俺程でなくとも驚いている。

> 近いですが、少し違います。 <

「おいおい、冗談だろ!？デュナメスだったって…あれがブレスレツトになったのかよ！」

> 冗談ではありません。それよりもまずは私の名前を決めて下さい。
<

突然名前を決めろって言われてもなあ…。

「ちょっと待って。ガンダムデュナメスって一体何？」

> マスターのいた世界にある機動兵器の名前です。 <

おいおい、一番知られたくないから喋らなかつたのに！

「おい、勝手に…。」

> マスターはもう戻らないのでしょうか…いえ、どちらにしてもマスターはあの世界へ戻ることは出来ないでしょう。 <

「何でだ？」

>マスターが世界から一度でも戻ることを拒んだことで喻え座標が分かっても行けば次元震が発生するようになっていいるからです。 <

「次元震って…それじゃ危険過ぎてニールさんは戻れないよ…。」

「次元震ってそんなに危険なのか？」

「…下手すれば星一つ跡形もなく消すぐらいの威力にもなります。しかも一度発生すると自然に収まるまで止める手立てはありません。話を戻しますが、機動兵器ってなると質量兵器で戦うってことですよね？」

なのはの説明におぼろげに理解していた俺はあまりショックを受けなかった。

それじゃあ、どっちにしたって戻るのは無理だな。

「ああ、まあ俺たちが乗っていたガンダムはほとんどビーム兵器だったがな。」

>…一応言いますが、この世界では質量兵器は基本的に使用禁止です。 <

「じゃあ、どうやって戦うんだよ。」

>それは…魔法です。<

は？

あり得ない。ここはファンタジーの世界だったのか？

「何言ってるんだよ。いくらなんでも…。」

「本当です。私も使えますから。ね、レイジングハート。」

>はい。<

見るとなのは胸元に赤くて丸い宝石の付いた首飾りから声が発せられた。

「それもデバイスっていう奴か？」

「はい、私のデバイスのレイジングハートです。」

>初めまして。<

「お、おう。」

少し戸惑いがあるが挨拶を返す。

>それで、名前は決めて下さいましたか？<

ハロ…って感じじゃねえし、他にじっくり来るものはないしな。

「…なら、デュナメスにしよう。」

元がガンダムデュナメスならこれが一番しっくり来る。

>了解、デバイス名『デュナメス』登録完了しました。 <

「でも、リンカーコアはニールさんにはあるの?」

>あります。私がこうして創り出されたのが証拠です。 <

リンカーコアについては追々デュナメスに聞こう。

「なら問題ありませんね。…あ、もう戻らなきゃ。それじゃまた来ます。お医者さんから“くれぐれも動かないように”とのことですよ。」

分かったと俺が言ったのを最後になのは部屋を退室した。

「…さてと、話してる時は言いそびれちゃったが、宜しくなデュナメス。」

>はい、マスター。 <

なんでこの世界にいるのかは分からねえけど、まずは戦いのケガを治さねえとな。

それから数ヶ月の間は治療に専念した。

不思議なことに右目等の怪我は疑似GN粒子を浴びたにも関わらず、再生が進み見事に完治した。

疑似GN粒子を浴びると通常は細胞組織の破壊だけでなく、再生をも阻害してしまう。

ジョイス・モレノから負傷した時に治療がてらに話を聞かされた。

だがまあ、ありがたいと言ったらありがたい。

右目がないとスナイパーとしての力を発揮出来ない。

現在はこの世界で最初に話したなのはから彼女の友達に俺を紹介したいということで、その友達の一人のフェイトの実家に来ている。

ピンポンとなのはがインターホンを鳴らす。

そこから長い金髪の赤い瞳が特徴的な女性が顔を出す。

「あ、なのはいらっしやい。その人がニールさん？」

「うん、そうだよ。」

笑顔で応えるなのは。この娘は笑顔が本当に似合う。

「初めまして。俺の名前はニール・ディランディだ。」

「フェイト・テストロッサ・ハラウオンです。宜しくお願いします。」

律儀にお辞儀をするフェイト。

「宜しくな。それと別に敬語じゃなくていい。俺も最初からこんな感じだしな。」

「はい、じゃなかった。うん。」

「じゃあ、早速お邪魔してもいい？」

「うん、二人とも入って。」

「お邪魔します。」

なのはが先に入って靴を脱ぐ。

俺もそれに習って靴を脱いだ。

家の中に入る時に靴を脱ぐという習慣は日本特有の習慣で俺はアイランド出身だからそういう習慣はない。

だが、刹那が日本で仮の拠点を設けていたこともあってスムーズに済んだ。

「ニールさんは確かアイルランド生まれなんですよね？」

「ああそうだ。あっちでは家に入る時に靴を脱ぐ習慣は無いんだ。」

「でも、慣れてるみたいですね。」

「一時期日本に泊まったことがあったからな。」

そう言いながら俺となのははフェイトに案内されながら居間に向かう。

部屋に入るとそこには男が一人に狼らしい奴一匹いて、女性3人ぐらいた。

一人、すごく小さい銀髪の女の子がふわふわと浮いているようだが…。

ていつかほとんどが女性か…。

「紹介するね、左からザフィーラさん、ヴィータちゃん、はやてちゃん、リンちゃん、クロノくんだよ。」

なのはが順番に紹介してくれたが一気に言われては覚えきれない。

「おいおい、一気に紹介されても覚えきれねえぞ。」

「あ、あはは、ごめんごめん。」

「おいなのは、そいつのこともちゃんと紹介しろよ。」

赤い髪をおさげ2つにして分けているどう見ても子供に見える女の子のヴィータがなのはにしかめっ面で文句を言う。

「あ、うん。それじゃあ…」

「いや、自分でやる。」

こればかりは自分でやった方が後に良い。

「え、いいの?」

「ああ、自己紹介ぐらいはちゃんとやらねえとな。」

「うん、そうだね。」

「俺の名前はニール・ディランディ。この度、時空管理局に入ることになった。」

「ならあたしらもちゃんと名乗らねえとな。…あたしはヴィータ。

お前があたしのことを子供だと思ってるだろうけど、あたしの方が年上なんだからな!」

正直、指差してそう言われてもピンと来ないがここは敢えて乗ることにする。

「おう、宜しくな。それとヴィータって呼ばせてもらうが、その代わり俺のことは好きに呼んでくれて構わない。」

俺は手を差し出ししてみる。

「お、おう。」

少し驚きながらも握手に応じるヴィータ。

ヴィータの手はその小さな手に似合わず、手マメがいくつも出来ていた。

…随分、マメが出来てるな。管理局は戦闘もあるってなのはが言っていたから、この子も鍛えているのか？

「お、おい、手を離せ。」

気付けばずっと手を握っていた。若干頬が朱に染まっている。

「ん？ああ、悪いな。」

俺はすぐさま手を離す。

もうええ？と聞いてくる茶髪のセミロングの女の子。あの小さな銀髪の子はいつの間にか膝に乗って座っていた。

「次はうちらや。うちは八神 はやてといます。そんで、うちの膝に乗っとるんはリインフォース（ツヴァイ）です。」

「はやてちゃんのユニゾンデバイスのリインですう。」

デバイスの種類に関してはまだインテリジェントデバイスしか知らない。

「ユニゾンデバイス…どういうデバイスなんだ？名前からして何かと融合するみたいだが…。」

「ユニゾンデバイスというのは、別名『融合型デバイス』とも言われていて、所有者と融合を果たすことにより、驚異的な能力向上を果たす機能を持っているんです。私のマイスターははやてちゃんなのですよ。」

リインが簡単に説明しながらはやてをちゃん付けで呼ぶ。見る限り、かなり仲がいいようだ。

ただ俺はユニゾンデバイスには何かデメリットはあるんじゃないかと思ったが、皆忙しいとなのはから聞いているので後で自分で調べることにする。

「じゃあそろそろいいか？…僕の名前はクロノ・ハラウオン。艦船『アースラ』の艦長を務めさせてもらっている。あと、君の隣にいるフェイトの義兄だ。宜しく頼む。」

「ニール・ディランディだ。ニールでいい。宜しくな、クロノ。」

俺は握手をするために手を差し出す。その手をクロノは何も言わず穏やかな笑顔で応じる。

「仕事ではクロノ提督と呼んでもらうが、普段はクロノでいい。」

少し生真面目で固いが、こいつとは上手くやっていけそうだな。

「さて、一通り喋ったところで…。」

ふとあの青い狼の方を見ると、俺の気のせいかもしれないが少しだけ寂しそうな表情に見えた。

「なあ、その狼…確か、ザフィーラだったか？紹介しないでいいのよ。」

「あつ…ごめんな、ザフィーラ。」

「いや主よ、お気になさらず。」

…喋れたのか。

まあ、青い狼つて時点で喋れる気はしてたしな。

「あれ、ニールさんはあまり驚かへんなあ。」

「魔法があるんなら、別に喋れてもおかしくないだろ。」

「…ニール・ディランディといったか。なかなかやるな。私の名はザフィーラだ。主はやての守護獣を務めている。」

気に入られた…のか？

「やるかどろかはこれから見てくれれば分かる。」

「…そうさせてもらおう。」

所謂寡黙な奴つてところか。…刹那の奴もあまり喋らなかつたなあ。まあ、喋るときは結構大事なことも言っているが…。

「さて、もうええか？…本当は他にもいるんやけど、生憎残りの皆は仕事とかが入ってるから来られへん。それにこの人数が揃うのは珍しい方なんよ。」

「まあ、そりゃそうだな。聞いた限りじゃ皆忙しいらしいしな。」

これもなのはから少しだが聞いた。時空管理局の状況は暇潰しで読んでいた雑誌で大体把握している。

ソレスタルビーイングのガンダムマイスターとしては見過ごせない内容ばかりで、特に管理局のきな臭い部分が目についた。他の世界に干渉出来るのであれば、放って置くわけにはいかない。

だが、今の俺にはガンダムのような力もないし、何よりもう俺は死んだ身で誇りは捨てていないとはいえ最早ソレスタルビーイングではない。

だから管理局のことが分かった以上はその管理局に入り、自分の出来る限り管理局を変えていく。

それが今の俺自身の今後の方針だ。

…意識をはやてへ向けると先程とは打って変わり、真剣な表情になっている。

「…でここからが皆が集まった目的なんやけど、ここにいる皆でニールさんの今後を決めます。まずは本人は時空管理局に入るって言うてますけど…なのはちゃん、ニールさんはリンカーコアは持つとるん？」

話が長くなりそうなので適当な椅子に座る。

「うん。ニールさんのデバイス『デュナメス』がリンカーコアがあるって言うてたんだ。で、念のために検査したらちゃんとあったよ。」

入院中に検査をしてリンカーコアというものを自分でも確認している。

因みにランクはBだ。要は普通のレベルということらしい。

「じゃあ、次は魔法の使い方は？」

「教えてないよ。」

退院したばかりだからな。

「ならばニールさん、デュナメスはミッドとベルカどっちですか？」

「確か…ミッド式だったな。…だが、射撃向きだっつう話だから俺向きなのは間違いない。」

「射撃得意なんですか？」

「ああ、俺がいた世界ではスナイパーをやっていた。」

ガンダムマイスターとしてデュナメスに乗って戦ったことを含め、もう10年以上はやってきたからな。射撃ばかりは誰にも譲れねえ。

「スナイパー…ですか。」

全員が驚きと悲しみの表情で俺を見る。

この反応はしょうがねえ…。

実際、人を殺してる訳だからな。

「…次の質問なんやけど、デバイスの種類は何ですか？」

聞かれたのはだが、ううんと唸って考え込む。

「シャーリーに調べてもらって、インテリジェントデバイスでほぼ間違いないんだけど…何だかブラックボックスみたいなのがあってちよっとインテリジェントデバイスと呼んでいいのか分からないの。」

それは俺もよく解ってない。

「なのはちゃん、どういうことなん？」

「どうもフォームの変形やバリアジャケットの機能はあるんだけど、他にも機能があるらしくて…その機能が何なのかを調べようとしたらデュナメスに拒否されちゃったんだ。」

別の機能がある？

「どついうことだ、デュナメス。」

「申し訳ありません、他の機能はマスターが魔導士としての力を付けるまで教えられません。」

「そうか。ならとにかくまずは魔法を扱えるようにならねえとな。」

こればかりは焦っても仕方ねえ。

「まあデバイスの方はこの際置いとこうか。魔法を教えるのはなのはちゃん、任せてもええ？」

「うん、いいよ。でも訓練学校に入る間までだよ。そうだよね、ニールさん。」

俺は怪我を直す間、なのはと共に今後のことを考えた。

まず1ヶ月間はなのはに時間を開けてもらっては基本の練習に付き

合ってもらおう。勿論、なのはが教導や任務で忙しい間は自分で練習をする。

その後は訓練校で1年間更に訓練を重ね、管理局への入局を目指す。そして入局して2年後にはやてが設立を目指す部隊に入る。

「ああ、そつだ。だから宜しくな、可愛い教官殿。」

「や、やだもつ、ニールさんつたら…。」

「んっふふっ、なのはちゃん顔赤いで。それとフェイトちゃんもニールさんを見る目が怪しく見えるけど気のせいかな？」

「「もっ、はやて(ちゃん)!!」「」

なのはとフェイトはからかってきたはやてに迫っていく。

二人とも顔を赤くしながら迫るのでおかしくてつい笑ってしまう。

「ははははは…。」

「うっ、ニールさんまで…。」

「まあそう拗ねんなよ。」

俺はなのはの頭をポンポンと軽く叩く。

(…ちょっと恥ずかしい。それにやっぱり身長あるなあ。)

なのはがそう思っていたことはニールは知らない。

「さて、次は住まいなんだが…どうする？」

「私の家は…」却下だ！「やっぱり…。」

現在、なのはは親元を離れて暮らしている。その中に男一人入るのは色々とまずい。

俺は聖王病院を出たばかりなのでまだ何も決まっていな。

「流石に1ヶ月も耐える自信がねえ…。」

「まあそりゃそうやな。ニールさんだって男やしね。」

「でもフェイトちゃんとはやてちゃんも無理じゃないの？」

「うーん、確かにうちは部屋余ってへんなあ…。」

「私たちの家はどうなの、クロノ。」

「僕たちの家も余りはないぞ。」

「別に俺は床で寝たって…。」

「ダメ！ニールさん、まだ万全じゃないでしょ！？」

一応、ケガは一通り完治はしてんだがどうもブランクのせいで動きが鈍い。

右目の調子も気になるから射撃練習もやっとかねえと…

「分かった、分かったからあまり顔を近づけるな！」

「う、ごめんなさい。」

そこで顔を赤くしないでくれ！

「じゃあ…やっぱりなのはの家しかないね。」

「ニールさんなら歓迎するよ！」

そんな笑顔で言われたら断れねえよ…。

「それならなのは、お前の家に泊まってもいいか？」

言われた瞬間にもう子どもみたいに喜ぶなのはの笑顔が目の前にある。

「うん、宜しくね！」

こうして俺の今後が決まったのだった。

いや…

こうして俺のハードな1ヶ月が始まった…。

.

第1話 ニールのデバイス（後書き）

次回から後書きにニール本人やデバイスなどの設定を載せていこう
と思います。

それと、もし質問や小説でここを直してほしいところがあればこ
でお答えします。

第2話 可愛い教官の優しい基本指導（前書き）

また早い更新となりましたが、流石に毎日はきついので次は週に一回にします。

後書きにニールの設定を書きました。

次はデバイス版デユナメスの設定を載せます。

第2話 可愛い教官の優しい基本指導

第2話 可愛い教官の優しい基本指導

その後、俺はなのはの部屋に案内された。

なのはは今は親元を離れてミッドチルダで暮らしている。

とはいえ地元学校には行ってらしく、その時には帰ってるそう
だ。

で今、俺はなのはに色々と生活での取り決めについて話していたが…

「なのは…もう少し女の子の自覚を持ってくれ…。」

なんと、俺がいるにも関わらず着替えようとしたんだ！

なのはは以前美人だと褒めてみたら「フェイトちゃんの方がスタイルいいよ。」と言って謙遜していた。

だがなのはもかなりの美人なのだ。

その彼女に目の前で着替えなんてされたらたまらない。

「じゃはは、ごめんねニールさん。」

これから俺は大丈夫なのかと不安になったぞ！

「とにかく、着替えたり風呂入ったりする時は言ってくれ！」

「はい。」

大人びているかと思えば16歳の女の子とは思えないぐらいに子どもっぽく見えるのは。

でもこの子の笑顔は本当に可愛い。

「で基本は今日から教えてくれるのか？」

「うん、丁度今日は教導の予定も無いし、訓練室も貸してくれるっていうから。…外で待ってて、準備するから。」

「分かった。」

俺はそう言って外に出た。

待ってる間、俺はブレスレットになっているデュナメスと話すことにした。

「デュナメス、魔法は何か使えるものはあるか？」

>基本として魔力弾による攻撃魔法があります。それ自体は大抵の魔導士と同じです。<

「そっか。」

>ただ、マスターの射撃能力を最大限に引き出すために一般に出回っている杖ではなく銃型の武器になります。<

「お、そりゃ有難いな！」

>基本の形態はライフルです。マスターが一番慣れている武器です。<

「でも以前は教えてくれなかったじゃねえか。」

入院中に一度聞いた時は何も言ってくれなかったのだ。

>あの時は治療に専念して欲しかったので話しませんでした。
<

確かに聞いたらやってみたいとか思っていたかもな。

「デュナメス、ありがとな。」

>いえ…。<

俺がお礼を言っていたらなのはが出てきた。

「お待たせ！…何話してたの？」

「ああ、俺の力が生かせるかを聞いていただけだ。」

「そうなの。まあとにかく、訓練室へ行こう。」

なのはが先に行き、俺はその後へ付いていった。

付いた部屋は一見何もなかった広い部屋だった。

「じゃあまずニールさん、セットアップをして下さい。」

「どうすりゃいいんだ？」

「じゃあ、先に私がやるから見てて。レイジングハート、セット、アープー!!」

「stand by ready set up!!」

レイジングハートが言った瞬間、なのはがピンク色の球体に包まれていく。

「何だあ!?!」

暫く待ち、光の球体が収まるとなのはの服が白を基調とした青のラインや赤の大きなリボンなどが付いた服に変わっていた。

スカートは前だけが短い動きやすい感じのスカートになっている。

髪型も左のサイドポニーからツインテールに兔の耳のようなリボンで纏められたものになっていた。

さらになのはの左手には赤くて丸い宝石に金色の三日月のような形に何故かマガジンらしきものが付いた杖が握られていた。

…あれがレイジングハートの戦闘形態って訳か。

「これが私のバリアジャケットとレイジングハートね。実はもう一つ違う形態があるけど、それはまたの機会にね。」

「ん、あ、ああ。」

呆けていた俺はただなのはの姿を見ていた。

正直、魔法と言えるものを見るのはこれが初めてなのだ。

「あ、そっか。ニールさんはまだ魔法に慣れてなかったんだね。だったら今度は攻撃魔法を見せてあげるね。レイジングハート、ワンショットね。」

「Acceler shooter。」

なのはは左手に持ったレイジングハートを前にかざす。

その赤くて丸い宝石からピンク色の球体が形成されていく。

あれが魔力弾という奴だろう。

そして、その魔力弾が放たれた。

放たれた魔力弾はそのまま壁に当たろうとしていた。

と思ったら壁すれすれで軌道を変え、こっちに戻ってきた！

「操作出来るのか!？」

俺は驚きのあまり、声を出す。

「うっん、操作っていうより誘導だね。レイジングハート、もういいよ。」

「yes」

魔力弾は壁に当たり、爆発する。

しかし、壁に傷一つない。

「壁にはある程度の魔力に耐えられるように出来てるから思いっきりやっても大丈夫だよ。」

「魔法ってあんなことも出来るんだな。」

「全部誘導出来る訳じゃないけどね。」

これを俺がやるのか…。

いざやるってなると何だか少し恥ずかしくなってきた。

なのはの格好は子どもの時にちよつとだけ見た魔法少女○リカ○○の○っていうアニメの主人公の女の子に近いのだ。

てなるとこれからの俺は「魔法青年 ニール・ディランディ」ってなるのか…。

何かシュールな光景が目に見えんできたぜ…。

って何考えてんだ、俺！

「じゃあ、私と同じようにやってみて。」

切り換えだ、切り換え！

よし、大丈夫だ！

「じゃあ、行くぞデユナメス。」

>いつでもどうぞ、マスター。<

「デユナメス、セットアップ！」

「stand by ready set up！」

俺の左手首のブレスレットに付いている緑の宝石から深緑色の光が放たれる。

その光はやがて俺の周囲を包み込む。

そして包まれたところで、俺が着ていた服が光になって消えていく。

（なっ！？）

おいおい、バリアジャケットを解いた後は大丈夫なのか！？

そう思いながら遂に全裸になってしまった。

（今の状態を誰にも見られたかねえな…。）

そう思っていたら、段々とさっきまで着ていた服とは違う別の服が光の糸から体にまとわりつくように形成されていく。

深緑色の半袖半ズボンのボディスーツ

その上に白いラインの入った長袖で茶色の上着と紺色のズボン

茶色と緑の手袋と首にクリアブルーのサングラス

そして緑色に黄色の縁取りのされた足首ぐらいまであるコートのように形成される。

武器はガンダムデュナメスのものに似ているが、弾の射出口になるマズルが大抵のライフルと同じ丸い筒に相手の照準が合わせやすいように台形の突起が付いている。

（俺が着ていた私服と配色が似ているな）

CBのガンダムマイスターだった頃は、緑色の半袖シャツに紺に近い青色のズボン、茶色のボアベストに手を保護するための皮手袋という出で立ちだった。

なんて思い出していたら光が収まっていく。

視線の先にはなのはが呆然としていた。

「なのは、どうした？」

「ニールさんのバリアジャケットって結構カツコいいよー！」

「ありがとうよ。」

そうやってなのははバリアジャケットを解除する。

「さあ、これから訓練を始めるよ。」

「じゃあまずは、私がさっき使ったアクセルシューター、あれをやってみる？」

「デユナメス、出来るか？」

>マスターの指示があれば。 <

「行かせ、デユナメス！」

「accel shooter.」

デユナメスが唱えた瞬間、銃身からガシャコンと薬莢が飛び出す。そしてマズルの先から魔力が収束されていき、光の球体になる。色はモスグリーンだ。

「言い忘れていたけど、人によって魔力光の色が違うんだよ。」

「じゃあその人の個性が色に出るみたいなものだな。」

「そうね。じゃああそこにある的を用意したからあれに向かって放つてね。」

いつの間にか向こうに丸い地面から出て用意されていた。

随分手慣れてるな。

>マスター、集中して下さい。<

「悪い、デユナメス。…狙い撃つぜ！」

魔力弾が発射に見事にど真ん中を射抜く。

が…さつき見せてくれたなのはアクセルシューターと違い、俺のアクセルシューターは壁にまでダメージを与えていた。

「え、どういことなの？アクセルシューターは回転なんてしないはずなのに…」

なんと魔力弾がジャイロ回転したのだ。しかも弾速が速いにも関わらず、なのはは見抜いていた。

この子は相当の戦闘経験があるな…。まるで刹那を見ているみてえだ。

「なのはさん、デユナメスで放つ魔法は周囲に魔力弾を待機させることが出来ない代わりに、魔力弾をジャイロ回転させて放つことによって他のデバイスで放つ魔法より威力と貫通力を上げています。」

銃弾はジャイロ回転によって殺傷力が増す。

「…そうだとしたら、相手の防御を無効にしちゃうってことになるよね。…とんでもないことよ。」

俺もその凄さは分かる。

そうなら、それこそが俺の最大の武器になるし、相手への脅威になるからだ。

「うん、これは先が楽しみになってきたよ!」

考えていたなのはがいきなり子どものような無邪気な笑顔になった。

が何故か俺はその言葉に何となくだが、少し危機感を覚えていた。

(…何か押しちゃまずいスイッチ押ししまった気がするぞ。)

その勘が見事に当たったのは言うまでもない。

それからは入院中に落ちていた体力を上げたり、魔法のコントロールの練習、防御魔法の練習等をやった。

だがやる量が半端ではなく、終わった頃にはほとんどバテていた。

「じゃあ今日はおしまい。…ちょっといきなり飛ばしちゃった気がするんだけど、大丈夫？」

「きついが、まあ何とかなるだろ。」

>とはいえ、これ以上は怪我の元になりますので今日は止めておいた方がいいです。<

レイジングハートの言葉に従い、俺はバリアジャケットを解除する。

「もう夜になっちゃったけど、すぐに帰る？」

「いや、ちよつと5分ぐらい休ませてくれ。思っていたより体が重くなつてやがる。」

特に走り込みもやったせいで足が一番重い。

「じゃあ座るね。」

そう言って座るのは。

「俺も座るか。」

俺も胡座をかいて座る。

この訓練室は金属で出来ているため、少し冷たいが今は体が熱いために寧ろ気持ちいい。

「…そういや、なのはには兄弟がいるんだよな？」

「うん、お兄ちゃんとお姉ちゃんがいるよ。ニールさんは兄弟はいるの？」

「俺は双子の弟と妹がいた。」

「いたって…。」

「ああ、妹は俺が14の時に亡くなった…。弟は生きている。」

正確には、両親と共にKPSAのテロに…アリー・アル・サーシェスに殺されたがな。

こんな重い話を今なのはたちにする訳にはいかない。

下手に気を使って欲しくないから……。

「……ごめんなさい。」

「気にすんなって。確かに悲しいことだ。けどな、俺たちはその人たちの命を背負って生きていくんだからそればかりを考えてはいられないんだ。」

本当は最後に復讐に走った俺が言うことじゃねえがな。

「そうだね。それは私も分かるよ。」

「いい子だ。」

なのはの頭をポンポンと軽く叩く。

「……そうやって子ども扱いする。」

剥れるなのは。

本当に可愛い教官ってというのが似合うと彼女を見て思った。

その後一ヶ月間は主になのはが建ててくれたプラン通りに自主練しながら鍛えていった。

しかし、体力が戻ったもののアクセルシューター以外の魔法がまだ上手く扱えなかった。

そのアクセルシューターの誘導操作もまだ上手く出来ない。

原因はあのジャイロ回転。回転が掛かっているせいで操作性が大幅に落ちたということだ。

…まあ一朝一夕で出来るはずねえもんだからな。

なのはは教導の仕事や任務であまり居ない日が多かった。それでも暇があれば、色々と教えてくれたので感謝している。

で今日は最後の日ということではが用意したテストをやることになった。

内容はアクセルシューターで浮遊して動き回っている魔力弾を全て撃ち抜くというものだ。

射撃だけなら自信があるが、これは魔法のコントロールも試される

訳だから決して簡単ではない。

「じゃあニールさん、用意はいい？」

「ああ、こっちは大丈夫だ。」

「それじゃ… Ready go!!」

「よっしゃ、狙い撃つぜ！」

俺は早速、ライフルフォームになったデュナメスの銃口を一番近くの魔力スフィアにアクセルシューターを放つ。

が魔力スフィアは素早く避けてしまった。

「ちっ！」

舌打ちしつつその先にあつた違う魔力スフィアにまだ残っていたアクセルシューターを少し右に曲げて当てる。

「まず一つ！」

>マスター、スフィアから攻撃が！<

「ちっ、あっちも攻撃ありかよ！」

聞いてねえぞ、なのは！

「しまった、スフィアは攻撃出来るの説明しなかった…。」

四方八方から魔力弾が俺目掛けて飛んでくる。

どうにか攻撃に転じて動かない魔力スフィアを横に縦に回避しながら三つ破壊する。

がそれでもこれでは俺がやられちまう。

ライフルフォームでは捌ききれねえ！

何より障害物がないのが更に厳しさに拍車をかけている。

どうするっ…

>マスター、砲撃が来ます！<

「何！？」

いつの間につつたのか、5個の魔力スフィアが縦一列に並んでいた。

その一番先端部にあたる魔力スフィアから魔力の収束が起きている。

「やっべえ！」

今すぐ俺は自分がいた場所から退避する。

幸い俺に照準を合わせてる様子はない。

「あ…設定間違えちゃった。」

収束し終わった魔力弾は一気に柱となって俺がいた場所に放たれた。

俺は死にもの狂いで走る。

「助かつ…」

たと思つたら、何と撃ち終わったはずの柱が消えずに一直線に俺に向かつてきた。

「おいおいおいおい！」

これでは追い付かれるので、今度は左に逃げる。

ライフルを両手で持つてるせいで幾分走りにくい。

このままでは先にバテてしまう。

「だったら、大元を一つずつ叩くまでだ！」

「accel shooter」.

俺は移動しながらの狙撃を敢行する。

ブレたりして誤差が出ちまうがそんなこと言つてられない。

どうにか揺れないように脇に抱えながら照準を合わせて撃つ。

一つ

一番上の魔力スフィアに命中！

ちっ、追い付かれた！

今度は跳弾を試みる。

「アクセルシューター、狙い撃つ！」

ジャンプしてブレと誤差を計算に入れて撃つ。

真下が光の柱によって焼かれていく。

二つ

今度は下から二番目に命中！

それと同時に魔力による照射砲撃が止んだ。

「よし、これで残り三つだ！」

残り三つとなった魔力光はさらに動きを機敏にして、俺の射撃に対応していた。

数分間、三つの魔力光によるヒットアンドアウェイのせいで当たらず、逆にあっちの攻撃を喰らっていた。

「ったく、こんなに難しいなんて聞いてねえぞ！」

こりゃ不味いな。

「マスター、後ろです！」

「不意討ち上等！」

さっきまで当たらなかったアクセルシューターが漸く一つ当たった。

あと二つ

今度は残り二つの魔力光がクルクルと俺の周囲を回りながら攻撃してきた。

「そんな攻撃で俺はやれねえぞ！」

「accel shooter」

ライフルから放たれた魔力弾が一つに命中した。

あと一つ！

「これで終わりだ！」

「accel shooter」

より狙いをつけられるように離れ、渾身の一撃を放つ。

だが、魔力スフィアは上へと逃げた。

「逃がすか！」

俺はライフルを上に向けて放った魔力弾を無理矢理上昇させる。

今までジャイロ回転のせいで上手く誘導操作が出来なかった魔力弾はここに来て上手く上へと進路を変えてくれた。

弾速はこっちの方が速い。

魔力スフィアはこれ以上上昇しきれずに魔力弾が当たって飛散した。

「ふう、終わった…。」

すっかり集中力が切れ、ライフルを支えにして一息入れる。

そこにさっきまで離れていたなのはがやって来た。

「お疲れ様、ニールさん。」

「まさかここまで難しいなんて思わなかったぞ。」

言われたなのははバツが悪そうに俯いている。

「あの、実は設定間違えちゃったんです。」

なのはは舌をチロツと少し出して謝ってくる。

「はあ!？」

が、まさか設定を間違えるとは思わなかった。

「本当はもっと動きが単調になるようにするはずだったんだけど、設定を陸士部隊向けの難しい方にしちゃったの。ごめんね?」

なのは、ワザとか?

「でもスゴいね、魔力のコントロールが出来てたよ！それにニールさん、射撃が本当に上手いね。命中精度じゃ勝てないかも…。」

「いや、マグレだ。少しでも気を抜くと動きが滅茶苦茶になるか、消えちまう。それとそれ言ったらなのはの砲撃には敵わねえぞ。」

一度デイバインバスター見せてもらったが、ヴァーチェのGNバズーカと同等かと思わせる威力だった。

「何にしても、お疲れ様。明日から、陸士訓練学校だから今日はこれでおしまいね。」

「ああ、一ヶ月間ありがとな。」

そうして、俺の一ヶ月の訓練は終わった。

第2話 可愛い教官の優しい基本指導（後書き）

>名前<

ニール・ディランデイ

>ソレスタルビーイングでのコードネーム<
ロックオン・ストラトス

>性別<

男

>年齢<

25

>生年月日<

西暦2283年3月3日（00）

>出身地<

地球・アイルランド

>好きな食べ物<
ジャガイモ

>趣味<

読書

> 経歴 <

アイルランドで双子の兄として生まれた。

当時の家族構成は両親と弟のライルと妹のエイミィの5人だった。

しかし、ニールが10才の頃にKPSAの自爆テロに巻き込まれ、両親とエイミィが亡くなる。この時からテロを憎むようになった。

その後はスナイパーとなって生計を立てていく。稼いだお金の一部はライルに贈っている。

さらにその能力を見込まれてソレスタルビーイングに入り、ヴェーダの推奨もありガンダムデュナメスのマイスターに選ばれる。

2307年まで訓練を重ね、世界に対し武力介入を開始。

数多くのミッションをアクシデントが絡みながらもこなしていく。

だが、チームトリニティの介入により状況が一変。

一時3勢力が降伏しかけるも、疑似太陽炉が3勢力に渡ったことにより、次第にソレスタルビーイングは追い込まれる。

その戦いの中で仲間のティエリアを庇い、右目を負傷してしまう。

最後の戦いで家族の仇であるアリー・アル・サーシエスと交戦。

健闘するも、最後には相討ちとなり、GNキャノンの爆発に巻き込まれて爆風の中へと消えていった…。

.

第3話 三人の少女との出会い（前書き）

週一のつもりでしたが、思ったより作業が素早く出来たので更新しました。

まあ気まぐれでもあると書きましたし、いっか。（いいのかよ！b
y ニール）

後書きはデユナメスの設定です。

????の付いているところを知っている方は察しは着いていると思います。

第3話 三人の少女との出会い

第3話 三人の少女との出会い

次の日、俺はなのはの部屋を出て行き、ミッドチルダ北部にある第四陸士訓練校に入った。

今は入校式の最中で、俺は久しぶりの学校に懐かしさを覚えていた。

(学校なんて、長いこと行ってなかったな…。)

因みに俺の年齢はあっちにいた時の時間を換算すると25歳である。

今の今まで訓練に明け暮れて自分の誕生日のことを忘れていた。

「…しかと持って訓練に励んで欲しい。以上、解散！1時間後より訓練に入る。」

おっと、式が終わったようだな。

俺は慌てずになのはに教えてもらった敬礼をする。

さっさと部屋の割り当てを確認しねえと…。

俺はどの部屋に入ることになったのかを確認するため、掲示板のある方へ行く。

そこには人だかりが出来ていたが、身長が俺より高いか同じぐらいの奴があまりいなかったため、楽に見ることが出来た。

何となくだが、主に女性から好奇の目で見られているがあまり気にしない。

部屋割りは男女区別ない組み合わせになっていた。

あと言い忘れていたが試験と面接はちゃんと受けた上で入っている。

「さて、俺の部屋は…。」

部屋割りの番号リストを見てみる。

自分の名前のある部屋は333号室、俺の誕生日の3月3日と同じだ。

それと一緒に同居人の名前を確認する。

相手は…ちょっと会ってみないと分からない。

「よし、行くか。」

そう思い部屋のある方へ向かおうとしたら、突然後ろからぶつかった。

「あつ、ごめんなさい。」

ぶつかったのはまだ12〜3歳ぐらいの青いショートヘアが特徴の女の子だった。

「こっちは気にしてねえが、そっちは大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です。」

「…そうだ、嬢ちゃんのグループを教えてくださいませんか？」

「あたしはBグループです。」

時間が押しているので歩きながら話すことにする。

「俺と同じだな。俺の名前はニール・ディランディだ。あと、楽な喋り方でいいからな。」

「はい、じゃなくて、うん。…あたしはスバル・ナカジマって言うの。宜しくね！」

「おう、「こつち」そ宜しくな。っともう部屋に着いたみてえだな。じゃあな。」

「うん、またねニールさん。」

これが後の付き合いになるとは思ってた俺だった。

部屋に入ると相方らしき女性がいた。

その女性は長い髪をお下げにして後ろに纏めていて、色は薄い紫と珍しい色になっている。

目は少しつり上がっていて、いかにも勝ち気な性格だという印象を持たせる。

「貴方がニール・ディランディさん？」

「ああ、そつだ。となると…」

「ちょっと何で男の人と相部屋なのよ！」

いきなり」挨拶だな…。

「ああ…言いたいことは分かるが、多分理由があると思うんだ。」

「知らないわよ、そんなこと！」

言いたいこと言わせてくれねえな…。

「落ち着けて！とにかく一年間やってく訳だから、自己紹介してくれねえとどうしようもない。」

「…ラーナ・シールズよ。」

「改めて名乗らせてもらつぜ。俺の名前はニール・ディランディ。」

二丁で構わない。…で詳しいことは時間がねえから後にして、訓練があと30分で始まるが先に着替えていいか？」

「ええ、いいわよ。」

「だったら、部屋の入り口で待っていてくれ。終わったら、呼ぶから。」

「…急いでね。」

そう言って部屋を出た。

これがこれから俺にとって大事な付き合いとなるラーナとのファーストコンタクトだった。

どうにか準備が終わり、間に合った。

今、俺たちは教官の訓練内容の説明を聞いていた。

ミッド式は杖から数種類

ベルカ式はポールスパという具合に練習用デバイスが用意されて

いた。

因みに俺はライフフルフォームのデュナメスだ。

練習のため、バリアジャケットは出さない。

「それは貴方のデバイス？」

「ああ、インテリジェントデバイスのデュナメスだ。」

>初めまして、ミス・ラーナ。 <

「えっ……そっか、インテリジェントデバイスって喋るんだっけ。」

大袈裟にはないものの、目を見開いて驚くラーナ。

まあ当然か、インテリジェントデバイスは本当はデバイスの中で値段が高いって言ってたしな。

でもこの娘は受け入れるのが早いな。

「俺は射撃が得意で、それに関しては誰にも負けない自信がある。ただ魔法のコントロールがどうも苦手……」

自分がここに来た理由を喋ろうとしたら、後ろから誰かが近付いて来た。

「誰にも負けない、ですって?」

俺は後ろを振り返る。

そこにはオレンジ色のツインテールのいかにもラーナみたいに強気な感じの女の子が下から俺を見上げながら睨んでいた。

「そんなこと、ここを卒業してから言ってくださいませんか?」

どうやら射撃は誰にも負けないという言葉に反応したようだ。

「いや、射撃自体は自信があるが、魔法の誘導操作が上手く出来なくて...。」

「ふざけているんですか!?ここは貴方みたいなふざけた人が来る場所じゃ...」

「ランスターさん、駄目ですよ!」

「ナカジマさん、止めないで！」

「あんたはさっきの…。」

「こんにちは、ニール。じゃなくて、ランスターさん、駄目〜！」

「ちょっといいかしら？」

さっきまで黙っていたラーナが割り込んできた。

「正直、私もその娘に賛成よ。貴方の射撃の腕なんて知らないけど、ふざけているなら帰ってもらえる？」

全部真剣に言ったんだがな…。

「ふざけているつもりはないさ。だが、さっきの言葉は撤回する。ここでは魔法のコントロールが出来なけりゃ射撃が上手いって言わねえからな。」

「しら、お前たち、早く来なさい〜！」

やっべ、話し込んだ。これ以上はまずいな。

「…とにかく、貴方なんかに負けないんだからね！」

「いいぜ、受けて立つ！」

そういや、あの娘の名前、聞いてねえ。

後でスバルにでも聞くか。

そう思いながら、訓練場へ向かっていった。

訓練場に着くと、俺を含めて4人も教官から説教と罰として腕立て伏せ20回を仰せつかってしまった。

「最初からこれはないわ！貴方のせいよ！！」

正直言うなら俺の方が踏んだり蹴ったりだ。

だが事実でもあるので謝っておく。

「それは悪かった。…そういや、ラーナのデバイスはどんなのだ？」

「他に文句はあるけど、まあいいわ。私のも特殊で、シールドバンカーって言って盾にパイルバンカーの付いた攻防一体のベルカ式の武器よ。デバイスはアームドデバイスで名前は『ズウエーレシグ』よ。」

喋りながら腕立て伏せをやるとは…。鍛えてるな。

「それで貴方のデバイスは見た限り、あのティアナという娘が持っていたのと似た銃型のような。」

「いや、どうもデュナメスが発射する魔力弾はジャイロ回転するらしいんだ。」

「魔力弾に回転を掛けるなんて聞いたこと無いわ。」

やっぱりそうか…。

「効果は威力が上がるだけじゃなくて相手の防御破壊もあるみたいなんだ。」

「…ちよつと待って。貴方、デバイスで誰かと模擬戦やったことあるの?」

「いや、模擬戦やったことあるならここにいなえぞ。ただ、ちよつと事情があつて知り合いに頼んで1ヶ月間、訓練施設を借りたんだよ。…よし、腕立て伏せはおしまい。」

俺は終わり立ち上がるが、ラーナも終わったのか、立ち上がった。

それを隣でさつきまで喋っていたスバルとあのオレンジの髪の娘が驚きながらこつちを見ていた。

「ニールさん、速っ!」

「喋ってばかりいたんだから適当に数えただけなんじゃないの?」

オレンジの髪の娘は辛辣に聞いてくる。

…後で誤解を解いた方がいいな。

「…ああ、間違えて30回やっちゃったな。」

「っ、ふざけるのも…。」

「今回ばかりは本当よ。彼ったら、私より速いペースで腕立て伏せしながら喋ってたんだから。」

あれ、初めてフォローしてくれた。

「……………ふんっ！」

言われても納得出来ないのか、オレンジの髪の娘は教官の所へ行っ
てしまった。スバルがその後を追っていく。

「ランスターさん、待って〜。」

「…私たちも戻りましょう。」

俺は頷いてラーナの後を付いていく。

教官から許可をもらって訓練に入る俺たち四人。

最初は互いのコンビネーションがどのくらいかを測るために一定の距離を交差しながら走る訓練をやる。

まずはスバルとオレンジの髪の娘から始まった。

「次、32番！」

「ちゃんと合わせて。」

「うん！…レディー、ゴー！」

スバルは相方の言葉に頷いて、共にスタートを切った。

「ひゃあー！」

…かと思いきや、勢いのあまり履いているローラースケートから砂ぼこりを巻き上げながら独走してしまった。

（おいおい…。）

多分、今の俺は苦笑いをしているだろう。

「コラー、32番！何をやっているか！！」

当然、教官は怒る。

隣で見ていたラーナも頭を押さえて呆れていた。

「勢いはいいけど、力入れすぎよ……。コントロールが出来てないわ。」

ありやりや、スバルは相方に説教されてるぞ。

「次、33番！」

「俺たちの出番だな。」

「…足を引つ張ったら承知しないわよ。」

勿論、気を付けるさ。

「行くわよ、レディー、コー！」

二人同時に走り出す。

スタートは同時で足並みも揃っている。

しかし、ここで身長差と足の長さの差なのか、ニールの方が少し先に出てしまっていた。

その上、ラーナのデバイスであるズウェーレシグの大きさと左手だけで持つというアンバランスさが災いしてすぐに勢いが無くなってきた。

そこで俺はラーナに合わせるためにペースダウンした。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫よ。それよりもうすぐ交差点ポイントに来てるわ！」

見ると交差するようにコーンが置かれてあった。

「俺がどうにかタイミングを合わせる。だから、ラーナは気にせずに走ってくれ。」

「……………」

交差点ポイントに来たところで俺たちは互いの進路を変える。

接触しなかった後は2、3回交差する。

しかし、3度目の交差のところで俺はラーナの武器に足を引っ掛けてしまった。

「うおわっ！」

危うく転びそうになるがどうにか持ちこたえる。

そしてその後の道はどうにか連携を重ねてゴールまでたどり着いた。するとラーナがしかめっ面で俺に近付いてきた。

「ちょっと、合わせるって言うついて私のシグに足を引っ掛けないでよー！」

シグは多分、ズウェーレシグの愛称のようだが…なんと手厳しいな…。

「悪い、俺のミスだ。」

事実そうだしな。

「…私は男と何て本当は組みたくないんだからね！」

…この娘に何があったのか、何故男嫌いなのか、俺は気になったが次の訓練のこともあるのでそのことは一旦保留にした。

次は垂直飛越の訓練。

相手を押し上げて上から引っ張り上げて高い壁を越えるというものだ。

「いい？私が先に行くから、ちゃんと上げてよね！」

「…分かった。それじゃいくぞ、一、二丁の…三！」

俺はラーナの右足を支えて一気に持ち上げた。

ラーナは上手くジャンプして、壁に乗った。

「よし、上手くいった。ほら来なさい。シグ、ロープを出して。」

ラーナはズウェーレシグの中央部分から魔力で出来たロープを出す。

「分かった！」

俺はそのロープを掴んで素早く登っていく。

「ひゃあああああつ！！！！」

登りきったところで上空から悲鳴らしき声が上がった。

「またあの娘たち！？」

見るとスバルが相方を飛ばす際に力を入れすぎて空高く飛ばしてしまっただ。まっただ。

「っと人のことを見てる場合じゃねえな。これから降りるが、俺から先に降りた方がいいよな。」

「ええ、そうね。私が降りるときに貴方が下敷きになっても助けてくれればいいし。」

なんかいちいち言うことに棘があるなあ…。

「はあ…。じゃあ先に降りるから、俺が降りたらお前も降りてきてくれ。」

そうやって俺は壁を降りていく。

そして降りきったところでラーナも降りる。

「えっ!?!」

が今度はラーナが足を引つ掻けてしまい、体勢を崩してしまう。

「!?!?危ねえ!?!」

俺は落下地点に移動してラーナを支えた。

その際にズウェーレシグをラーナが手放して、俺の隣に落下した。
移動してなかったら直撃だ。

(お、俺も危なかった。)

「いたた…。」

「おい、大丈夫か。」

「…え？」

ラーナには特に外傷はない。因みに今、お姫様抱っこの状態になっている。

「な、ななな…!!」

違った、外傷は無いが羞恥心で顔を赤くしている。

ってさっさと離さねえと!

「今降ろすからっていただだっ！」

「降ろせ　　！！！」

「ほほほふへふは！（頬をつねるな！）」

堪らず頬が痛いのを我慢しながらラーナを降ろした。

降ろしたところで、つねられていた頬が解放される。

「いつつ…：やられたのは分かるが、そりゃねえだろ！」

「…ふんっ！」

これじゃ骨折り損のくたびれ儲けだ。

この娘とやっていけるか本気で心配になってきた…。

????side

真っ暗だ…

何にも見えねえ

何処にいるかも分からねえ

つまんねえ…

最後にあの緑のガンダムのパイロットに額撃ち抜かれちゃったから、俺は死んじゃまったのか…

戦いてえ…

もっと戦いてえ…

もっと戦いを楽しみてえ…

こんなところで死んでなんてやらねえ…

あの人を撃つた感触

人を斬り殺した感触

MSで敵を破壊した感触

MSで人を消し飛ばしてやった感触

どれも忘れられねえ

だが今は何より…

あのガンダムのパイロットを殺してやりてえ！

あの野郎に俺を殺してくれた仕返しをしてやりてえ！！

確か双子の兄弟だったよなあ！？

まずは俺の体を吹っ飛ばしてくれた奴から殺してやる！

奴のお蔭で暫く不自由になっちまったからな…

それを倍にして返してやる!!

「お目覚めかな？」

「誰だ、てめえ。」

「ドクターに失礼ですよ！」

「いいよ、ウーノ。」

初めまして、私はジェイル・スカリエツィという者だ。科学者をやっている。君は偶然なのか、私の秘密基地の中で倒れていた。どういうことか、説明してもらえるかい？」

「知らねえよ。俺様だって何でこんなところにいるのか分からねえんだからよ。」

「なら、まずは君の名前を教えてもらおうか。」

「へっ、そつだな。俺の名は……」

アリー・アル・サーシェスだ！

赤き傭兵がミッドチルダの地に来て来た

第3話 三人の少女との出会い（後書き）

> デバイス名 <

デュナメス

> デバイスの種類 <

ミッド式・インテリジェントデバイス（仮）

> 魔力光 <

モスグリーン

> バリアジャケット <

白いラインの入った長袖で茶色の上着と紺色のズボン、下着は深緑色の半袖半ズボンのボディースーツになっている。

茶色と緑の手袋と首にクリアブルーのサングラス、緑色に黄色の縁取りのされた足首ぐらゐまであるコートを羽織っている。

> フォームの種類 <

・ライフルフォーム

デュナメスの基本となる狙撃銃。中々遠距離に対応しており、特に遠距離による砲撃、狙撃戦に真価を発揮する。

形状はガンダムデュナメスのものに似ているが、弾の射出口になるマズルが大抵のライフルと同じ丸い筒に相手の照準が合わせやすいように台形の突起が付いている。

・ピストルフォーム

デユナメスが二本の小型拳銃へと変化し、近々中距離による射撃戦、乱戦などに対応している。

こちらはデユナメスのGNビームピストルと全く同じ外見になっている。

カートリッジはライフルフォームと同じ銃身から排出される。

・サーベルフォーム

ガンダムではビームだった刃が魔力刃になった以外は用途が同じ近接専用の装備。

・???? (フルドライブ)

>魔法<

・アクセルシューター (accel shooter)

なのはがニールに最初に教えた魔法にして、最初に覚えた魔法。本来は誘導追尾性能が極めて高く、なのはもその性能をコントロール出来るようにと考えて教えたが、デユナメスが持つジャイロ回転付加のせいで威力と貫通力が上がる代わりに、コントロールが悪くなっている。

・デイバインバスター (divine buster)

武装隊配属後に教わった直射型砲撃魔法。こちらはデユナメスのジャイロ回転と相性が良く、全体的になのはのデイバインバスターを上回る性能になっている。

・ステインガレイ (stinger ray)

武装隊配属前に会ったクロノから教わった直射型魔法。発射から着弾までが速い。威力もあり、狙撃にもってこいなためにニールはこの魔法を一番多く使っている。

・フォトンマシンガン (photon machine gun)
ピストルフォームでのみ使用される魔法。

ニールのデユナメスは周辺に魔力の弾を浮遊させることが出来ないため、魔力弾を連射することでそれを補っている。

威力より連射性を重視したため、一発だけではアクセルシューターより劣るが、ジャイロ回転のお蔭で薄い防御魔法なら貫通か破壊が可能になっている。

・バーストショットガン (burst shotgun)
ピストルフォームの直射型魔法。

近接でしか使えないが、ショットガンのように魔力を爆発、拡散させて広範囲に攻撃出来るようになっていて、この魔法に関してはジャイロ回転の機能は働かないため、バリア破壊には向かない。

・????

> 詳細 <

・ニールが00の世界からミッドチルダへ飛ばされた時に何故か彼の近くに落ちていたデバイス。このデバイスは元はガンダムデユナメスだったものが変化したもの。しかし、どういう経緯でデバイスになったかは不明。

特殊な機能として、射撃魔法に誘導操作と少しだが命中精度を犠牲

に威力と貫通力を上げるジャイロ回転を自動付加させる機能がある。

なお、管制人格の声はソレスタルビーイングのクルーでオペレーターのフェルト・グレイスと同じである。

第4話 ここにいる理由(前書き)

今回は繋ぎの話と言ってもいいような話です。

因みにラーナのモデルはアニューです。

…こっちの更新が早い理由は、コピペする手間が運営しているサイトの移転より楽なんですよ。

それと今回は設定の公開はありません。

第4話 ここにいる理由

第4話 ここにいる理由

訓練校に入ってから2ヶ月が経った。

最初はギクシャクしていた俺とラーナのコンビはラーナが文句を言いなながらも、どうにか連携も能力もメキメキと上がってくるようになった。

ただ、たまにラーナの様子がおかしくなることがある。

俺の顔を見て俺がそっちへ顔を向けると反らすし、突然慌てだすし…。

…何となくだが、ラーナは…

「おっはよう、ニールさん！」

バシッと俺の背中を叩くスバル。

「痛て！おいこら、スバル！強く叩きすぎだ！！」

「あはは…すみません。」

これは俺の視点だが、スバルとオレンジの髪の娘 ティアナは最初
はドタバタコンビという感じではあったが次第にまとまりが出てき
た。

それとティアナの名前はスバルに教えてもらった。

「…あ、いた。ナカジマさん、行くわよ！」

「あ、待ってランスターさ〜ん。」

ティアナと俺は謂わば年の離れたライバルという関係になっている。

お蔭での娘からほとんど話しかけられることはない。

…やっぱり第一印象が悪かったようだな。

それは仕方ないとして、ラーナと一度ゆっくり話す機会も設けた方
がいいな。

放っておいたら、そのうちとんでもないミスをしそうだ。

そう思いながら今日もまた訓練に励む俺だった。

夜

今日の訓練が終わり、各々が部屋へ戻っていく。

俺は既に風呂に入ったので部屋へ戻って寛いでいた。

ラーナは今風呂に入りに行っている。

「マスター、なのはさんから通信メールが来てます。」

「なのはか、見せてくれ。」

デユナメスの腕輪に付いてる緑色の宝石からホログラフが出てメールの内容が表示される。

>ニールさんへ

こんばんは。あれからどうしているか、気になってメールを送りました。

私は相変わらず、教導官として各部隊を転々として回っています。

そちらはどうですか？

なのはよりく

「因みにこのメールはマスターが訓練中に届いたものなので終わるまで附せていました。」

「そうか、サンキューな、デュナメス。」

「早速返信しますか？」

「頼む。」

「何してるの？」

「ああラーナか、ちょっと知人からメールが来てたから返信してい

るところなんだ。」

「どんな人？」

「高町　なのはっていつんだが…。」

「…た、高町　なのはですって!？」

「うおわっ!」

「根掘り葉掘り聞かせなさい!」

ラーナは俺の胸ぐらを掴んで揺さぶる。

ていつか揺さぶり過ぎて頭が…

「ラーナ、落ち着いてください!」

デュナメスのお蔭で収まった。

「…で何でその人と知り合いなのよ?」

ちよつとどうしようか迷ったのでここ2ヶ月で漸く使えるようになつた念話で相談する。

> 俺が別世界の人間というのは言つた方がいいか？<

> 変に追求されるのも不味いですし、それは説明しないと話が繋がりませんから話した方がいいでしょう。<

相談を終えてラーナに目を向ける。

「…これから話すことは他言無用にしてもらえるか？」

「え、ええ。」

「まず、俺はこの世界…ミッドチルダの人間じゃない。」

「この世界の住人じゃないってことは次元漂流者ってこと!？」

「まあ、そうなるな。」

∴この反応は当然か。

「そんな人が何故この訓練校に入れたの？」

「さっき言ったなのはに戸籍とか住む場所とかをどうにかしてもらったんだ。」

「そうなんだ。∴何か狡い気もするけど。」

「∴それを言われると痛いな。」

「そこはここでは立場が弱かったから仕方ないわよね。∴いくらなんでもそのままでこの世界を生きていけるはずないしね。」

やはりこの娘は本当はいい娘だ。

性格は本当に勝ち気で口では色々厳しいことを言っているが、実は結構色々見えていて優しいところもある。

それに俺の状況を早く理解したあたり、柔軟なところもあるのが分

かる。

「へっ!?! な、何言ってるのよ!?!」

「マスター、褒め殺しになってますよ。」

「あれ、口に出てたのか!?!」

うおっ、ラーナの顔が真っ赤だ。

「ほ、他にも聞きたいことあるけどいい?」

「いいぜ。言ってくれ。」

「貴方が次元漂流者っていうことは前いた世界はどこにあるの?」

「俺がいた世界は地球だが…地球は地球でも、別世界の地球なんだ。」

ラーナの顔が驚愕の色に染まる。

「並行世界ってこと!?!」

「そうだ。そして本来、俺は既に死んでいるはずの人間だった…。」

「病気とか?」

「違う、戦っていた。」

思い出す…

最後に宇宙で対峙した家族の仇であり、仲間の人生を狂わせた男。

アリー・アル・サーシエスとの戦いのこと…。

だが、俺は確かに奴の機体であるスローネをGNアームズに付いていたGNキャノンで吹き飛ばした。

それと同時に俺も被弾して爆発に巻き込まれたが…

あいつらは大丈夫だろうか?

「マスター、今は気にしても仕方ありませんよ。」

ラーナに聞かれてもあれなので、念話で話す。

>…分かつちまったか。 <

「それに、貴方の仲間たちはそんなに弱い人たちでしたか？」

>そんなことはない！あいつらはきつとあつちで頑張ってくれてい
る！！ <

「ですから、今はそれを信じて頑張ってください。」

「ちょっと、何私の前で念話なんか使ってるのよ！それに筒抜けだ
から殆んど聞こえているわ！！」

気付けば目の前にラーナが近付いていた。それも顔と顔がぶつかり
そうなくらいの距離だ。

つて…

「おわっ!」

「きゃあっ!ビックリさせないでよ!」

至近距離にラーナが迫っていたものだから驚いてしまった。

「ビックリしたのはこっちの方だ!」

「お二方落ち着いて。」

「もう!...で、前の世界では何をしていたの?」

「...話すのはいいが、これから話すことは他言無用で頼む。」

彼女に本気であることを示すため、睨み付ける。

「わ、分かったわ。」

了解を得たところで俺は太陽炉などの話してはいけない部分を除いて俺がやってきたことを全て話した。

話をし終わって少しの間、静寂が部屋に漂う。

ラーナの表情は悲しみと怒りが無い交ぜになったようになっていく。

「話、分かったわ。正直、まさかそんなに苦しい思いをしてきたなんて思わなかった。」

俺は黙って聞いている。

デュナメスもまた、沈黙を保っている。

「貴方たちが掲げた紛争根絶というのはあまり納得出来ないし貴方が人を沢山殺してきたというのもそう簡単に許されないけれど、でも…ニール・ディランデイという一人の人間が味わって来たことを思うと、全てを否定しきれないわ。」

彼女の口から放たれた言葉は、全て受け止めなければならないこと。

許されてはいけないこと…。

「でも、なら貴方は時空管理局で貴方は何を指すというの？もし同じやり方をこの組織でやるというなら、私が全力で止めるわ！」

今度はラーナが俺を睨む。

その上で、待機状態のズウェーレシグに手をかける。

話すと決めたのだから、こうなるのは当然だ。

「いや、状況にしても管理局の規模にしても武力介入したら逆にまずいのは分かっている。」

この世界にはロストロギアという危険な代物がある。

過去にそのロストロギアの暴走で星一つ滅んだという事実もある。

もし下手に武力介入をして、戦争の悲惨さや平和の尊さを訴えたとしても星が滅んだなんてことになれば武力介入する意味が無かったことになる。

その上、本当の意味でサーシエスと同じただ害しかもたらさない存在になってしまう。

「ならどうするつもり？」

「この時空管理局で俺は違うやり方で平和のために力を使う。そのためにはまずはこういった訓練校で自分を魔導士として鍛え直す必要があったんだ。」

「でも高町教導官に1ヶ月訓練を見てもらっていたんだよね？」

「そうだが、彼女はただでさえ忙しいからあまり見てもらえなかったんだ。それに、この世界を自分の目で知る必要があった。」

「貴方がここにいる理由はよく分かったわ。でも、それなら囑託魔導士になることも出来たんじゃないの？」

「囑託魔導士は確かになれただろうが、長くやっていくとなると不安定な立ち位置でいる訳にもいかなかったから止めた。それに、俺の魔法のコントロールが悪いのは知っているだろ？」

「そついえばそうだったわね。…ちょっと待って。貴方は訓練用デバイスで練習したことあるの？」

「ありません。マスターには必要ないかと…。」

「なんで試さないのよ！だってジャイロ回転でコントロールしづらくなっているんでしょ！？」

ラーナのあまりの剣幕にたじろぐ。

っていうかちょっと怖いぞ！

「あ、ああ、そうだ。」

「なら、ニールのコントロールはまだ正確な値が分からないってことじゃない！だから次の自主訓練で借りてくるからやってみなさい！！」

これがまさか良い結果に繋がるとは思わなかった俺だった。

翌日

突然、2ヶ月分の成績の発表の掲示板が貼られていた。

その結果、俺とラーナのコンビは4位になっていた。

「なかなか良いところまで行っているわね。でもあの娘たちに敗けているのが悔しいわ。」

あの娘たちというのはスバル・ティアナのコンビのことだろう。

最初あったスバルの失敗は今では特に問題はない。さらにちらつとだが、練習風景を見た限りティアナが的確な指示が出来るように見える。

俺たちが敗けている原因は、俺が成人していて戦いのスタイル自体が確立していることが関係しているだろう。

実際、MSにしても生身にしても俺の間合い、戦いの中での駆け引き、コンビネーションのやり方などは既に分かっている。

だから、スバルやティアナ、ラーナのような成長はあまり期待出来ないのだ。

となれば、魔法の訓練を中心に時間を充てればよかつたのだが、この2ヶ月は連携を中心にしていたためにあまり時間を充てられなかつたのだ。

「焦ったってしょうがねえさ。さて訓練でも…」

「よお、ラーナじゃん。」

「誰：あんだ、よくもノコノコと！」

横から声を掛けられたラーナが顔を向けると、目付きが悪い男がこっちを見ていた。身長は170前半ぐらいだ。

「へっへっへっ、久しぶりだな。」

「誰だ、こいつ。」

「知らなくて良いわ、行きましょう。」

だが、男がラーナの手首を掴む。

「まあ、待てよ。男嫌いなラーナちゃんが何でそんな奴と組んでいいのかと思ってね。」

「離しなさい！」

「不思議だよなあ、あれだけ可愛がってやったのに逃げちゃうんだ

「からな。」

「!!!!!!」

ラーナの顔が青ざめる。

…どうやら男嫌いは大部分がこいつが原因のようだ。

「ねえ、また一緒に…いでで…!!」

よく分からないが、俺は男の手を掴んで思いつきり握る。

「悪いが、離してもらえるか？俺の相棒が嫌がってるんでな。」

「何だてめえ！こっちが何をしようと思手たる…!!」

「知るかよ。なら俺が貴様を止めるのも勝手だろっが！」

「…ふざけんなよ、この野郎！」

男が空いた右手で殴ってきた。

だが、俺はそのパンチを難なく左手で受け止める。

…大した威力でも速度でもない。

「…事情は知らねえがな、俺たちの邪魔になるならもう相棒に話し掛けるな！」

俺は冷徹に相手を見据える。殺気も一緒に相手に向ける。

「ひっ！」

俺の目を見た男は後ずさる。顔も青い。

この程度でよく訓練校に入れたものだな。

「…行くぞ、ラーナ。早く行かねえと訓練に遅れる。」

「え、ええ。」

俺たちはその場を後に訓練に向かう。

…向こう側で険しい表情のティアナと何故かニコニコしているスバルがこっちに向かって来た。

「何でこっちに来るんだ？それにティアナの機嫌が悪いぞ。」

「煩いわね！」

「今、ランスターさんはカルシウムが不足してるんですよ。」

「は？何言ってるの。そうじゃなくて…。」

何となくだが、気分を入れ直すためにスバルに乗っかってみる。

「ああ成る程、そりゃ牛乳飲まねえと駄目だな。なあ、ラーナ。」

「へ？え、ええ、イライラしてたら訓練にも集中出来ないわよね。」

「ち、ちょっと…。」

「なら、今度訓練の休みの時にでもティアナに奢ってやるっ。」

「またあんた勝手に…!」

「良いね! だったらうちのギン姉も誘っていい?」

「おっ、スバルはお姉さんがいるのか。勿論、良いぜ。」

「あの…ニール、私も行っていい?」

「ああ、いいぞ。」

「もうあんたたち…。」

「ティアナは来いよな。」

「もう…いいです。」

シクシク…

三人の拘れに拘れたトークについていけなかったティアナだった。

訓練が終わり、今俺とラーナは自主訓練をやっている。

内容は勿論、ラーナが昨夜言っていた練習用デバイスでの誘導型攻撃魔法の練習だ。

「それじゃ色んな方向に魔力光を用意したから、それをこの位置から動かずに撃ってね。」

「了解だ。デユナメス、今回は俺だけでやるからサポートは無しだ。」

「分かりました。」

「いくぜ、アクセルシューター、狙い撃つぜ！」

深緑の魔力弾が青い宝石のような部分から形成、発射される。まずは真上にある的から狙う。

そう念じていたら、放った魔力弾が的のある真上にいきなり進路を変えた。

そして、的へと吸い込まれるようにど真ん中に命中する。

「おりゃっ!」

更に間髪入れずに前、右、左、後ろなどあらゆる方向に配置された的を少しズレた後ろを除いてど真ん中に命中させた。

それを見ていたラーナは驚いてこっちを見ていた。

「やっぱりコントロール良いじゃない!」

「いや、後ろだけ少しズレちゃった。俺としてはまだ甘い。」

「しかし、それを思うとデュナメスは余程制御の上手い人でないと無理なのね。」

それだけ分かりやこの訓練には意味があるって訳だ。

「ラーナ、あと4セットはやっておきたい。配置してくれるか?」

「分かったわ。」

意味があると分かった以上はしばらくこれで練習だ！

サーシエス side

俺はあれから大将から簡単にこの世界と使われている武器について説明された。

んでこいつらが何をやっているかを聞いた時、俺は面白いことが待っていると確信した。

でっかい組織といつちよ戦争をおっ始めるってよ！！

勿論絶対参加してえと思ったから、雇いさえすればてめえらの味方になってやると言っただけだ。

で今はそれが通り、大将が俺が持っていたガンダムのデータを元に造った出来たばかりのデバイスとやらを試しに動かしている。

名前はアルケー、俺があつちで最後に使っていたガンダムだ。

今の俺の姿はアルケーそのものだ。

最初は手足が長いから間合いの違いがあつたりとちつと手間取つちまつたがそれももう手足のように動かせる。

「はっはー！」

俺のガンダムは飛べたから飛べねえかと思つたら飛べた！

さっきもフアングを飛ばしてみたら、これまた俺の思い通りに動く。

全くスカリエツティの大將様々だな！！

俺は魔法なんて信じなかったが、MSの他にこんな面白い戦い方が
あると知つて気分は最高だ！

あとは戦争をおつ始めるまで待つだけだ。

「ドクター、あれなら模擬戦をやらせても宜しいのではないですか
？」

「そうだねえ、ウーノ。さっきも武器を使っていたけど、どうやら
彼は戦い慣れているようだから一度トーレを呼んでやらせてみよう。

…サーシエス!!」

「おう、何だ大将。」

「一度、模擬戦をトーレとやってみないかい？」

「いいねえ、今の俺は最高に気分がいい!このまま、今日は戦わねえなんて勿体ねえ!!」

「ふふ、いい返事だ。ウーノ、トーレを呼んできてくれ。」

「はい、ドクター。」

少し待つと青い髪の短髪の姉ちゃんがやってきた。

「ドクター、お呼びですか？」

「ああ、実はちょっとサーシエスの相手をして欲しいんだ。」

「今日デバイスを渡したばかりではないのですか？」

「それが最初は手間取っていたけど、今はもう手足のように使いこなしているんだよ。で彼がどのくらいの実力かを測っても問題ないと思ったのと、彼が近接戦闘が得意だと言っていたから君を呼んだ。」

「ドクターがそう言うのであれば従います。」

トールという姉ちゃんはこっちに顔を向けると僅かにこっちを睨み付ける。

俺は空中から地上へ降りた。

「…正直、貴様が私に勝てるとは思えない。今日デバイスを使い始めた奴に私が負けるはずがない。」

大層な自信じゃねえか！

初めて会った時も睨んでたなあ…。

「へっ、そうじゃねえと戦い甲斐がねえよな。そうだろ、姉ちゃんよお…！」

だったらさっさと倒されてもその自信があるか試してやるよお！

俺は早速ビームガンを撃った。

「ISライドインパルス！」

姉ちゃんの手足から二枚ずつ翼のようなものが生え、俺が撃ったビームを簡単に避ける。

あれが大将の言っていた戦闘機人のISインヒューレントスキルって奴か。

「へっ、いい反応じゃねえ…か！」

俺はビームガンになっていたバスターソードを右手に持ち、袈裟ぎみに振りかぶる。

「その程度！」

姉ちゃんは上に避け、急降下してライダーキックをかまそうとする。

だがな…

「こつちには読めてんだよ！」

俺は姉ちゃんの足を掴み、そのまま上へ急上昇する。

「なっ、ぐっつっ！」

天井に行き着いたところで、今度は急降下して叩きつける。

「がはっ！」

姉ちゃんは背中を叩きつけられたため、起き上がれずに苦悶の表情を浮かべる。

「おいおい、この程度か？なあ、トーレの姉ちゃんよお。」

「ぐっ、誰が！」

姉ちゃんは素早く俺に蹴りを入れようとする。

足の羽が俺の右腕に触れると僅かに切れ目が入る。

「だから、甘えって言ってんだろっが！」

少しバックステップしてまた足を掴む。

「まだまだ！！！」

だが今度はもう片方の足で顔を狙ってきた。

だが俺には通用しねえ。

「ところがぎつちよん！！！」

俺はその蹴りをバスターソードで弾いた。

「くっ！！！」

「逝っちまいな！！！」

そのままバスターソードの刃の反対側を姉ちゃんのどてっ腹に叩き

つける。

殺すなど大将のお達しがあるからよ。

「ぐはっ！」

腹に諸に一撃を入れられた姉ちゃんは今度は起き上がれずに気絶した。

「死なねえようになってるがな、そうじゃなかったら死んでたぜ？
つと、聞こえてなかったか？大将、終わったぜ！」

「全く君は本当に素晴らしいよ。トーレは高速戦闘が得意なのをまるで知っていたかのように動きを止めたのだからね。…ウーノ、君はどう思うっ？」

「信じられません、トーレが一撃も入れられずに負けるなんて…。」

このくらいで驚いちゃ困るぜ、まだフアングも使っていないしな。

「なあ大将、俺様疲れちまったから休ませてもらえねえか？」

「ああ、ご苦労様。少し休んでくれ。」

大将の言葉を聞いた俺は部屋を出た。

スカリエツテイ side

サーシエスがいなくなった後、私はトーレに近付いて起こした。

「大丈夫かい、トーレ。」

「はい、大丈夫です。…うっ！」

やはり強く叩きつけられたことで背中か腹部のどこかをおかしくしたようだ。

「…どうやら、少し基礎フレームを損傷してしまったようです。」

「申し訳ありません、ドクター、ウーノ。」

「気にすることはないよ。私も彼がここまで強いとは思っていなかったからね。」

私は嘘偽りなくそう思っている。彼の動きはおそらくだが、戦闘のプロという動きと言っていいぐらいに無駄がなかった。

「はい、魔法を使える訳でもないのに……。」

実際、リンカーコアはあったもののランクはC程度と私が創った戦闘機人たちより低い。

にも関わらず、あそこまでの動きを見せた上にトーレを圧倒したのだ。

これはもはや彼の運動能力がずば抜けて高いこと、そしてトーレ以上に戦闘経験が豊富であることを意味している。

けれどそれ以上に私が持っていたアルケーガンダムとやらのデータを元に造り上げたデバイス『アルケー』にあそこまで早く馴染んだことが驚きだった。

…私はずっとでもない拾い物をしたようだ。

「ふふふふ、ウーノ。」

「何でしょうか、ドクター。」

「どつやら彼のお蔭でさらに計画がスムーズに進みそうだよ。」

「そうですね。あれならば、オーバーSランクの相手を任せられま
す。」

あれならエース級の魔導士も倒せる。

「いえウーノ、あの男は本気を出していませんでした。」

「そうだねえ、彼はファングを使ってなかったしね。」

「ドクター、ファングとは何ですか？」

「ファングというのは言うなれば遠隔操作の出来るビットのような
もので、魔力弾を放ったり、魔力刃を形成して突撃させて攻撃する
武装のことだよ。他にもバインドで捕縛する機能もある。ああいう
のは初めて造ったから流石に手間取ってしまったよ。」

元からあったデータをよくアレンジしなくてはならなかったから開

発に何か月も掛かってしまった。

「彼に勝てる者たちはいないのでしょうか？」

「私としてはそうとは限らないが、この中では今のところ彼が一番強いね。」

それを言われたトーレは黙ってしまった。

「…では、今以上に強くなります。そして次は勝ちます！」

「うむ、その意気だよトーレ。」

本当に私はいい拾い物をしたよ。

第5話 交わる道（前書き）

これで1日から5日連続更新です。

ラーナの設定はエピソードに載せることにしました。

それと、この小説が盗作ではと一部で言われていますがサラマンドは
アマツ アマツ ひつや ひつや 天、火兔と同一人物です。

ですから盗作の心配はありませんので大丈夫です。

第5話 交わる道

第5話 交わる道

あれから3ヶ月が過ぎた。

訓練は密度が増し、ミッドとベルカに組が別れるという形も増えてきている。

俺はあの自主訓練のお蔭である程度はデュナメスでの誘導操作が出来るようになった。

今まで言っていなかったが、防御に捕縛、結界などの魔法は今まであまり上手く出来ていなかった。

だが、それも今は問題なく使いこなせている。

一方、俺とコンビを組んでいるラーナだが、互いの素性を知ってからはすっかり阿吽の呼吸と言えるぐらいに連携が出来ていた。

勿論、実力も付いてきている。彼女の弱点だった機動力も幾分マシになってきていた。

他にもラーナやスバル、スバルのお姉さんのギンガ、ティアナと共に休日に遊びに行ったりもした。

閑話休題

そんな感じで特に問題なく訓練校も残り半分に差し掛かっていた。

「ねえ、ニール。」

机で書類を書いていたラーナがこっちに来た。

書いている書類は入隊希望のアンケートだ。

「何だ。言っておくが、まだどこに入るかは決めてないぞ。」

「それは分かっているわ。そうじゃなくて、ちょっと聞いてほしいことがあるのよ。」

「どうしたんだよ、改まって。今更遠慮する必要はねえだろ?」

「う、うん。…「ごめん、今のなしで。」

どうしたんだ、ラーナの奴。

そう思いながら、俺はアンケートに再び目を向けた。

翌日の訓練

射撃の訓練が終わり、俺はティアナと話していた。

「なあ、ティアナ。お前らはどこの部隊に入るつもりなんだ？」

「私も決まってるじゃないけど、スバルと多分一緒になると思うわ。そういうニールさんはどうするつもり？」

「俺も決まってるはないが、ラーナと同じ職場にするつもりだ。」

「それはラーナさんも？」

「ああ、そうだ。それと、ラーナは武装隊にするって言ったな。」
武装隊とは戦闘が見込まれる事態が発生した場合、前線の戦闘員として駆り出される部署だ。

戦闘専門の魔導師が所属しており、その他に航空魔導師専門部隊として『航空武装隊』、地上の航空武装隊と言える『地上本局航空魔導師隊』がある。

勿論、今の俺とラーナは飛べないため、武装隊だけに入れるということになる。

「ニールさんの射撃能力なら他でもやっていけるんじゃないの？」

「ここで訓練して分かったんだが、俺は戦闘の方が自分の力が一番発揮出来るみたいなんだ。…決めた、俺も武装隊にしよう。」

ちよつと決め方としてはどうかと思うが、後にそのまま俺たちの部署は武装隊となるのだった。

ラーナ side

ニールと組んで3ヶ月

最初こそ私は男ということ、あまり彼を信用してなかった。

でも、最初に訓練していて…私が今まで出会ってきた身勝手な男たちとは違うことが解った。

それもそのはず、彼は普通とは言えない…辛い人生を歩んできたのだから。

勿論、どんなに辛くても…紛争根絶という矛盾した理想を掲げても…そんな彼が人をたくさん殺してきたこと自体は許されることではない。

だけど、私はそれでも彼を許す。

彼の悲しそうな目を見て、彼が本来は嫌だったんだと解った。

…そんな彼を見ているうちに胸に痛みが走った。

ティアナやスバルが喋っている時も何故かモヤモヤした感情になる。

ニールと呼んだり、顔を見たりするのが時々恥ずかしくなる。

もう彼が好きなのが分かつちゃうなあ…。

ニールは気付いてるのかな？

でも、今は告白はしない。

言うのなら、お互いに職場に慣れてからが良いなあ……。

でも、いざ言おうと思うと何だか言いつづいて……。

私ってこんなに臆病だったかな？

そうだ。

武装隊に慣れてきたら言おう。

私の気持ちを伝えよう。

あなたにだけ素直になりたいから

なのはside

彼が訓練校に入ってからは、連絡を取り合っている。

勿論、私のことを周りの人に言うと騒ぎになる上にニールさんに迷惑が掛かっちゃうから口止めはしてある。

で、1ヶ月前に連絡取ってみたけど元気だった。

ただ、その時にパートナーのラーナさんに見つかっちゃったけど…。
もうニールさんったら…。

でも、訓練校に入ってから随分よくなっただけだって言ってたなあ。

よし、武装隊で教導することになったら、一度ニールさんとラーナさんの二人と模擬戦やってみよう！

何だかニールさんの卒業が楽しみになってきたなあ…。

ティアナ side

スバルとの最初の出会いはとんでもない目に遭った。

スバルが勢い余って走り出しちゃうわ、高いところまで投げ飛ばされるわ、それで教官に怒られるわ…もう散々だったわ…。

でも、早いうちに馬鹿力を矯正出来たお蔭でその後は特に問題なく訓練が進んだわ。

それと、スバルのことお嬢だって言ったけどそれは間違いだった。

スバルとギンガさんも…

っていけないいけない！

この問題を今考えても仕方ないわ。

そんなスバルだけど、部署希望のアンケートに「私とのコンビを続ける」なんて書いていた。

これからも気苦労が耐えると思つと憂鬱に…。

え、やっぱりティアナはツンデレですって!？

誰がツンデレよ！

もう、なんで私の時はこうなの!?

…作者の悪意が見えるわ。

(それ僕のセリフ!? by アレルヤ)

もうスバルの話はいいわ…。

その訓練校でもう二人、気になるコンビに出会ったわ。

それはニールさんとラーナさん。

ラーナさんはちょっと私と似ていたからか、すぐに仲良くなれたわね。

…まさか、スバルやニールと一緒にからかってくるとは思わなかったけど。

それにしても、段々ニールさんへの態度が豹変と言えるぐらいに柔らくなっていた。

もしかして…ニールさんに恋をしたのかな？

ニールさんを見る度に顔赤くしてるし。

一瞬可愛いと思ってしまったわ…。

恋する乙女ってあんな感じなのかしら？

ニールさんはもう最初の印象は最悪だった。

自信ありげに射撃だったら誰にも負けないと言っていたのが勘に障ったわね。

だってそんなこと言われたらお兄ちゃんのことを認めてもらえないみたいで…。

でも、今思えばあれはただのブラフじゃなかったのが分かる。

最初大したことないと思っていたのに、それはデュナメスの特殊な能力のせいで実際はすごく射撃が上手かった。

それだけじゃない。

ラーナさんとのコンビネーションの練習の時も支援も上手かったし、何よりラーナさんに変な男が絡んだ時に見せたあの気迫…。

本気で勝負したら勝てる気がしなかったわ。

あの人は一体何者なの？

気になるわ…

「ティアく、どうしたのボクッとして。って、うわあー!」

スバルが転けて私の胸にいいいいいい!?

「きゃああああ、胸を揉むなあ!」

私はセクハラをするスバルの頭を叩いた。

ベシツという小気味のいい音が鳴る。

しかも、周りの男子訓練生の中では鼻血出している奴もいるし！

「あ痛っ！ワザとじゃないよ。」

「こんの、バカスバル！！」

もう、またしばらくズッコケコンビのままな気がするわ…。

それが当たっちゃうんだから余計腹ただし…。

そこ、ツンデレ言うな…！！

ダンッ！！（アンカーガンの銃声）

第5話 交わる道（後書き）

気付いた方はいるかどうか分かりませんが、いくつか加筆修正を加えています。

あとちょっと今更ですが、文章でおかしいところなどがあつたら言ってください。

第6話 エースVSマイスター and 盾の騎士(前書き)

タイトル通り

なのはVSニール and ラーナ

です。

ちょっとバトルにはあっさりしているかもしれませんが。

第6話 エースVSマイスター and 盾の騎士

第6話 エースVSマイスター and 盾の騎士

俺たち四人は見事に訓練校を卒業し、それぞれの部署に配属された。

スバルとティアナは陸士386部隊の災害担当突入部隊へ

俺とラーナは武装隊へと配属された。

四人とも階級は三等陸士だが、俺は武装隊の訓練中に飛べるように練習している。

デユナメス曰く

「飛べなければ、私の性能を生かせません」

とのことだ。

最初は分かんなかったが、あのジャイロ回転のデメリットを思うと

何でそう言ったのかが解った。

因みにラーナも「最初より動きは速くなったものの、まだ少し機動力が低いから空戦の適性を持ちたい」ということで俺と一緒に訓練することになった。

俺は少しずつだが、浮き上がるようになった。

しかし、ラーナの方はまだ成果が出ていない。

まだ始まったばかりだ、焦らずにやっていこう！

それにしてもラーナ…お前って事務仕事が苦手なんだな…。

「大きなお世話よ!」

と言われながら相棒の事務仕事も手伝う俺だった。

武装隊に入って数ヶ月後、戦技教導隊との短期技能訓練が行われた。その中には最初にボロボロだった俺を拾ってくれたのはもいた。やった内容はここにきて今までやった訓練で一番厳しいものだった。終わった頃にはもうヘトヘトになるばかりで並の体力なら付いていけないぐらい密度が濃かった。ただお蔭で大分空を飛べるようになってきた。

「ニールさん、飛べるようになってきたね！」

色々考えていた俺のところになのはが近付いてきた。

「ああ、もつと練習すれば実戦に使えるようになるかもな。」

「そこでなんだけど、私と模擬戦やらない？」

なのはは魔導士としては一流で、しかもなつてから既に8年経ったという。

つまりは彼女との差は歴然だ。

「いきなりエースとやるのは無謀だろ。」

「それならラーナと組んでもいいよ？」

「まあ、それならな。」

勝てるかは分からねえが。

でも、ここで及び腰になったらガンダムマイスターの名が泣く。

全力でやらせてもらっぜー！

一通りウォーミングアップを終えてセットアップを終えた俺とラーナ。

ラーナのバリアジャケットは

上が紫がかった黒いジャケットに白い手袋

下がジャケットと同じ色のズボンに白い金属のカバーの付いたブーツという姿になっている。

ズウェーレシグは形自体は大きな変化はないものの、武装隊配属の折り、パイルバンカーが付いている部分とは反対の部分に加速用のブースターが取り付けられた。

これで機動力は補われている。

「模擬戦のルールは私のバリアジャケットに一撃当てたら勝ちで、二人とも戦闘不能になったら負けにするね。」

笑顔で説明するが、その説明からなのは自信が窺える。

（準備はいいか、ラーナ、デュナメス。）

（ええ、いつでも！）

「大丈夫です、マスター。」

「それじゃ、模擬戦、開始！」

模擬戦という名のエースオブエースへの挑戦が始まった。

「まずは俺から先制する。ラーナ、手筈通りに頼む。」

サングラス型のスコープを掛け、ライフルの銃口をなのはに構える。

「デュナメス、カートリッジロード!」

「了解、カートリッジロード」

デュナメスの銃身から薬莖が排出される。

スコープからホログラフが表示され、なのはに照準を合わせる。

「了解!行くわよ、シグ!」

「ja」

ラーナは盾を構えて、防御態勢に入る。

…いや、突撃態勢に入る。

「シグ、カートリッジロード！」

「エクスプロージョン！」

ズウェーレシグからも薬莖が排出される。

「いつけ ……！！！」

「Die Geb・(盾の突撃)」

ズウェーレシグから薄紫の膜が前方に形成される。

「ラーナ、それじゃ駄目だよ。」

「shield。」

なのはは冷静に突撃するラーナの攻撃を斜めに構えたシールドで受け流す。

「受け流された!？」

「これでラーナはアウトね。これはいきなり無謀なことをしたお仕置き。」

「divine buster.」

なのはのレイジングハートからディバインバスターが発射される。

大抵の奴ならこれでノックアウト。それは俺も同じだ。

そう…大抵なら。

「ああ、失敗した…なんてね。シグ!」

「ん?」

聞いていたなのはが怪訝な表情をする。

「absorption. (吸収)」

ラーナのデバイス、ズウェーレシグは防御に特化している。

だがそれだけではなく…

「Loschung・(排出)」

射撃系の攻撃を自分の攻撃に変える能力もある。

よし、このタイミングだ！

「いくぜ、狙い撃つ！！」

「divine buster」

二つのディバインバスターがなのはを襲う。

うち一つはジャイロ回転が加わった防御不可のディバインバスターだ。

これでなのはは避けるしかない。

これが俺たちの狙いだった。

「なるほど、これは確かに防御は出来ないよね。」

危ない状況でも流石にエースオブエースと呼ばれた高町 なのは教導官、冷静に分析してやがる。

「レイジングハート！」

「accel fin。」

直後に互いにぶつかったダイバインバスターは力の行き場を失い爆発を起こす。

「やった!？」

「油断するな、ラーナ！」

「ブレイク…シュート！」

「excellion buster。」

煙の中からディバインバスターに似た光の砲撃がラーナに迫る。

「うそっ、シグー！」

「panzer schild・(パンツァーシルト)」

慌ててシールド系の防御魔法で対応するが、その選択はミスマッチだった。

防御は破られ、直撃してしまっ。

「きゃああああー!!」

エクセリオンバスターの直撃を喰らったラーナはそのまま倒れてしまっ。

「ラーナ、くそっ!!」

再び射撃をしようとライフルを構える。

「devine shooter」

しかし、煙が晴れたところで向こうから魔力弾が飛んでくる。

「ちっ！」

舌打ちしてすぐにその場を離れる。

「ニールさん、意表を突くというのは確かに発想はいいし対応はしにくいけど、あれじゃその後の対応が遅れちゃうよ。その後のことも考えなくちゃ。」

付け加えるとあの吸収と排出の魔法は相手が放った攻撃魔法分の半分の魔力も消費しなきゃなんねえっていう欠点がある。

…要はどちらにしてもリスクだということだ。

「やっぱりダメか…。陣形を崩しまう欠点は分かってたんだが、一度やってみてもいいかと思ったんだ。勿論、実戦ではやらねえけどな。」

ラーナは猪突猛進な傾向があったからな。

それにあの作戦はそもそもラーナの発案だ。

「…後で、ちゃんとラーナに謝ってね。」

俺としてもあまりそんなやり方はしたくなかったが、直しておかないとそれが死に繋がることになってしまったために敢えてこのやり方を取ったのだ。

「それもちゃんとやっておく。」

「なら、続きをやるう！あとはニールさんだけ。私と1対1だよ。」

「…上等…！」

第二ラウンドのゴングが鳴った！

「デュナメス、カートリッジロード！」

付けていたサングラスを外して首に掛ける。

ガシャンと銃身から薬莖が一つ飛び出す。

「p i s t o l f o r m .」

ライフルが光り、みるみるうちに小さく二つに別れていく。

光が収まると、ライフルは二つの拳銃になっていた。

形状はデュナメスのものと同じになっている。

デュナメスが形を成したところで俺は走り出す。

「デュナメス、ニール・ディランディ、目標を狙い撃つ！」

「カートリッジ、ロード！」

「フォトンマシンガン！」

10発の魔力弾をなのに向けて連射する。

アクセルシューターやディバインバスターと威力は劣るが、大抵の
防御魔法なら貫通する。

「レイジングハート！」

「p r o t e c t i o n p o w e r d .」

なのはバリア型防御魔法で対応する。

魔力弾は当たったものの、全て弾かれてしまった。

「ちっ！」

やっぱり固えなあ…！

「まだまだ甘いよ、ニールさん。」

「d i v i n e s h o o t e r .」

なのはがレイジングハートを振り、魔力弾が発射される。

複数の魔力弾はそれぞれ別方向から俺に向かってくる。

「全部狙い撃ちだ！」

それぞれの拳銃から薬莖が排出される。

「photon machinegun」

二丁拳銃から深緑の弾丸が発射され、魔力弾を悉く撃ち抜く。

「デイベインバスター……」

砲撃が俺に迫ってくる。

「避けねえと！」

全て撃ち終わったところで回避に専念する。

「full burst」

がいきなり光の砲撃が炸裂弾のように拡散した。

「やべっ、デユナメス！」

「round shield」

耐えきれるか!?

拡散した砲撃がぶつかった。

どうにか防ぎきったが、まだなのはは攻撃をするだろう。

「マスター、砲撃が来ます！」

「本当に容赦ねえ！」

光の砲撃が煙を割ってこっちに来た。

直ぐ様避けようとするが、走ったんじゃ避けられねえ！

なら…飛ぶしかない!!

砲撃が地に当たり、爆発する。

それが俺の真下から見える。

「マスター、飛んできますよ！」

「うお、本当だ！」

何かなのは小さく見える…な？

「デュナメス、今何mだ？」

「約100mです。それよりも、攻撃が来ます！」

なのはから魔力弾が飛んでくる。

「デュナメス、カートリッジロード！」

「photon machinegun」

魔力弾を撃ち落としていくが、今度はさっきより数が多い。

「ちっ！」

舌打ちしながら逆さまになったり回転したりして避ける。

しかし、出来たばかりで地上での動きより遅い。

そのせいで一発が脇腹に当たる。

「どわっ！」

「マスター！」

当たりどころが悪く、体勢が崩れてしまう。

いつ来たのか、なのは同じ高さまで来ていた。

しかも、巨大な魔法陣の上で巨大な魔力球が形成されている。

…スターライトブレイカーじゃねえか。

体勢が崩れたままなので回避が出来ないことを悟った。

その上、防御魔法も意味を為さない。

完全に俺の負けだ…。

「飛んだのは少し驚いたけど、まだ実戦向けじゃないね。」

そりゃそうだ。出来たばかりでビュンビュン速く飛べる筈がない。

「だから、今日この後に少し練習ね。」

そこを笑顔で言われてもな。流石にそんなもの喰らって体力も魔力も残ってる自信がない。

「st arllight braker」

巨大な魔力の砲撃に飲み込まれていき、次第に意識が失われていく。

その中で俺は思った。

せめて練習する余力ぐらいは残してくれ…。

その後に俺がラーナに、ラーナがなのはに（教えたことが上手く出来なかったことであらしい）、なのはが俺に謝するというおかしな場面があったのだった。

サーシエス side

デバイスをもらってからというものの、ほぼ毎日が訓練ばかりだった。

以前に戦ったトーレの姉ちゃん以外の嬢ちゃんたちとも戦ってみたんだが、イマイチ物足りねえ。

俺は戦いとか戦争がやりてえんだが、大将がなかなか許可してくれねえ。

「あゝあ、そろそろ外で戦争がしてえなあ。」

部屋で暇を潰していたら、大将の顔がモニターに映った。

「なら、ちょっとやってほしいことがあるんだがいいかな？」

「お、大将じゃねえか。で、何やってほしいんだ？」

寝転がっていた体を起こし、モニターを右手で取る。

「実はガジェットドローンを出してレリックという赤い宝石のようなもの、まあロストログアというんだけど、それを回収してきてほしいんだ。他の者たちに行かせてもいいんだが、そろそろ君を一度外に出してもいいかと思ったんだ。」

「ははっ、暴れてもいいのか？」

「いや、あまり派手にやりすぎないようにしてほしい。まだ君を管理局に勧づかせるわけにもいかないしね。」

ちっ、まだお預けか…。

だが、今は外に出れるだけいいかねえ。

「すまないねえ。大きな戦争をするときは思いっきり暴れてもいいから、それまで我慢してくれ。」

「へへっ、了解だぜ大将！」

強い奴が出てくるといいなあ！

これが後に悲劇へと繋がるのだった

第6話 エースVSマイスター and 盾の騎士（後書き）

次はいよいよ、訓練編最大の話です。

ラーナの設定も出します。

それと、ニールはちゃんと彼のしゃべり方になってるか、ラーナはどう思われているか、その辺りが気になるのでどなたか書いてくれたら幸いです。

第7話 彼の願い…叶わず（前書き）

ラーナの設定ですがすみません、デバイスのデータは後程更新します。

それとお知らせを。

この小説は訓練編と機動六課編に分かれます。

しかし、訓練編は完結後も番外編を更新するのに使いますのでそのところはよろしくお願いします。

第7話 彼の願い…叶わず

第7話 彼の願い…叶わず

なのはとの模擬戦から1ヶ月、特にこれといって緊急になるようなことは起こってなかった。

ただあるとすれば、ラーナも段々強くなってきて今まで俺が勝っていたのについて一週間前に負けてしまったのだ。

いや、すっかり強くなっちまって…。

俺としちゃ、ラーナは相棒という感じなんだが…あつちはどうも俺のことが好きらしい。

俺の気のせいとも思うが、この間は腕を組んできたから間違いない。

でもよ…

俺はやっぱり…相棒としか見れない。

女性としては本当に魅力がある。

彼女は勝ち気なところやなのはが言っていた突撃思考とかはあるものの、結構家庭的で可愛いところもある。意志もあって安心して見てられるが、時折見せる脆さもなかなか良い。

…言ってることおかしくないか？

これじゃまるで…

だが…喻えそうでも、俺が彼女を受け入れていいのか？

確かにもう俺はあっちでは死んだ人間だが、たくさん人を殺した事実は変わらない。

そんな思いに囚われながらこの1ヶ月を過ごしていた。

今日もいつものように書類整理や訓練に明け暮れると思っていた午前の矢先のことだった。

部署のあちこちから緊急アラートが鳴り響く。

『市街地にて未確認体アンノウンが出現し、現場の陸士部隊では対応しきれないとの連絡が入りました。武装隊各員の出勤準備して下さい。現場が遠いため、ヘリでの移動となります。待機中の隊員は準警戒態勢に入ってください。』

「ニール、行こう！」

ラーナがこっちに来る。

アンノウンと聞いたからか、いつもより顔が強張っている。

「分かってる、出勤だ！」

すぐに走り出し、緊急時のヘリポートへと向かっていく。

幸い、体は暖まっている。

…けれど何だろうか、この嫌な感じは。

何か起こるといふのだろうか？

けれど、そんなのは関係ねえ。

俺たちを民間人を巻き込むロクでもない奴等なら狙い撃つだけだ！

現場はビルの地下

へりで移動中にロストロギア『レリック』の反応があったという報告が届いていた。

武装隊全員、既に武装は完了している。

しかし、敵に奪われてしまい、まだ取り戻せてないそうさ。

地下は戦いの痕なのか、所々で壁が破壊されている。

「何があるか分からないが、敵にロストロギアを奪われる訳にはいかない。迅速に回収するため、二人一組に別れてもらう。見つけ次

第、この地点に合流だ。…散開！」

隊長の指示に従い、それぞれがバラバラに行動する。

勿論、俺はラーナと一緒にだ。

「ニール、ヘリの映像で見たあの機械って確か…ガジェットドロ
ンだよな？」

「ああ、そうだ。短期訓練でなのはが言っていたアンチマギックフィールドAMFという厄介
な機能を持つ機械だ。」

このAMFが本当に厄介で、この機能のせいで並大抵の威力の魔法
では倒せないと言っていた。

しかし、俺のデユナメスに関してはあまり気にしなくてもいいとも
言っていた。

何故なら、ジャイロ回転の機能ならAMFを簡単に破れるからだ。

「大丈夫かな？私は初めてだから…。」

「弱気になるな。弱気になったら確実に負けるぞ！」

「うん、ありがとうニール。」

その笑顔が何故かいつもより綺麗に見えた。

「マスター、ロストロギアの反応が近いです。」

「ニール、あれじゃない？」

ラーナが右手で指差す方にはロストロギアを持ったガジェットが素早く移動していた。

182

「デユナメス！」

「stinger ray.」

なのはから教えてもらったクロノの直射型魔法を使う。

思惑通り、ガジェットは破壊出来たが当たったのは別のガジェットだった。

「ちっ、追っぞー！」

「マスター、敵の増援です！」

ざっと数えて10体かよ！

足止めなんて喰らってられねえのに！！

「…ニール、私のシグなら追い付けるわ。道を作って。」

「大丈夫なのか？」

「今奪取出来るのは私たちだけ、このままじゃ逃げられてしまっわ。」

「…あまり無理はするなよ、ラーナ。」

「大丈夫よ、伊達に鍛えてないわ！」

今はそれで行くしかないな。

「分かった！デュナメス、カートリッジロード…！」

薬莖が銃身から飛び出す。

「そこを…！」

[divine]

「どけえ！」

[buster.]

深緑の砲撃が二体のガジェットを巻き込み、爆発する。

「行け、ラーナ…！」

「ええ、シグ…！」

[fahrenheit for m.]

ズウェーレシグから葉莖が飛び出して、変型する。

見た目は盾から細長いサーフボードのような形になる。

「ふっ！」

ラーナはズウェーレシグに乗り、爆発の煙へ入っていく。

それを確認した俺はカートリッジを消費してピストルフォームにデ
ユナメスを変える。

急いで行かねえとな！

「…急がなきゃなんねえんだ、てめえら全員俺が相手にやってやる
」！」

無事でいてくれ、ラーナ…！！

サーシエス side

今俺はガンダムになったまんま、レリックつつ結晶をぶんどるためにこんな狭い地下にいる。

でも、地下にしちゃ少し広くねえか？

まあいいや、広い方がやりやすいつてもんだ。

「アリー兄、行かね の？」

ガジェットなんたらをベッドがわりに寝転がりながら言っているゼインの嬢ちゃん。

…何で嬢ちゃんって呼ばねえかって？

だってよお、大将の他にはほとんど美人の姉ちゃんかケツの青い嬢ちゃんばかりで同じじゃ混乱しちまうんだよ。

ま、クアット口の嬢ちゃんは嬢ちゃんと呼ばれるのは気に入らねえようだが。

「へっ、すぐに終わっちゃあつまらねえからよお…敵が来るのをここで待ってたんだ。」

「でも敵が来たらどうするの？それにまだレリック持ったガジェット戻ってきてないよ。」

「決まってるだろ…殺すんだよ。」

ていうかもう何人が殺してんだけどな。

時空なんたら魔導士ってのは大したことねえなあ！

ちょっと加減してぶっ叩いてやったら命乞いしやがった。

勿論、あんまりうるせえからさっさと殺してやったさ。

…こんな弱えなんて期待外れだぜ。

「アリー兄…えげつな！」

早く強え奴来ねえかってな。

ドオオオオオン（壁が爆発で破られる音）

破られた壁からガジェットなんたらが出てくる。

だがそこからさらに時空なんたら魔導士らしい嬢ちゃんがサーフ

ボードみたいなもんに乗って出てきた。

「！何、これ…。」

「ハツハツハツ、奴やつさんが来たぜ！」

どうやら気の強そうな嬢ちゃんみてえだな。

前の大將んとここで見たような髪の色だがそんなの気にしねえ！

今度は楽しませてくれよなあ！

ラード side

私は移動専用の形態、ファレンフォームのシグに乗ってガジェットを追っていく。

ファレンフォームのシグはホバリングのように地上や水上を走れ

るよつに出来ている。

しかし、その間はバリア系の防御魔法しか使えないのがネックになっている。

「間に合うかな、シグ。」

「おそらく間に合います。…ですが、この先にガジェットと違う反応が二つあります。それもアンノウン。その地点で何人かの陸士部隊の魔導士の反応が消えているようです。」

その分だと非常に危険、ということになるわね。

「でも行かないといけないわ。」

「私はマスターを守るために造られたデバイスです。」

「そうね。…見つけた!」

ガジェットが見えたと思ったら、奴等は壁を壊して先に進んでしまった。

「逃がさない！加速して、シグ。」

「ja。」

煙の向こうへと突っ込み、広い地下通路に出る。

…鉄分の匂いがする。

この嫌な匂いは…

「！何、これ…。」

目の前には陸士部隊の魔導士…だった人たちの死体が転がっていた。

「ハッハッハッ、奴さんが来たぜ！」

「マスター、気を付けて！」

右を向くと赤い…血の色の人型の機械らしきものが長い腕で大剣を両手に持ってこっちに振りかぶってきていた。

「はっ、シグ！」

「panzer hindernis」

ファールンフォームで唯一使える防御魔法でなんとか防ぐ。

「固えな……。けどな、こいつはどうだあ！」

大剣を上を持ち上げる赤い人型機体。

すると大剣が二つに割れるように稼動し、葉莢が飛び出す。

そして大剣から赤い粒子が漏れだし、大剣の刃を覆う。

「壊れちまいな！」

大剣が横薙ぎに振られ、バリアに叩きつけられる。

バリアはガラスのように破壊されてしまった。

「そんな！」

それでも大剣は勢いが止まらず、私に左脇腹に直撃する。

「あああああああ！」

そのまま壁に吹き飛ばされてしまう私。

…さっきので肋骨が折れちゃった。

痛い。

「マスター、大丈夫ですか!？」

「うっぐう、シグ…シルトフォームに戻って。」

「…分かりました。 s c h i l d f o r m .」

足に付いていたシグは元の盾に戻る。

「ちよいとー!」

その状態を好機と見たのか、赤い人型機体はまた大剣を持って私に襲いかかってきた。

「…シグ！」

「panzer schild」.

「また防御かよ、もうちょい攻撃してくんねえと張り合いがねえじやねえか!!！」

相手は何度も何度も大剣で防御魔法を斬り付ける。

「く…く…く…！」

こいつ、何て奴なの！

魔法を使わずにここまでやるなんて…。

だけど…

「やらねっばなしじゃないわ、シグ！」

「schild burst」

「むっ!？」

パンツァーシルトを爆発させて反撃する。

これで倒れるとは思わないけど、とにかく態勢をまず建て直さないと!

「…クッククック、やりゃあ出来るじゃねえか。ええ、時空なんたらの魔導士さんよ!」

そんな…傷一つ付いてない!

「けど、あまり長くやってると大将と姉ちゃんたちに怒られちゃうんでな…さっさと死んでくれや、ファング!!」

奴の腰の大きなサイドアーマーらしき部分から小型の獣の爪のような形状の機械が出てくる。

ヤバイ!

「シグ、ありったけのカートリッジを使っわよ！」

残っていたカートリッジを消費し、薬莖がたくさん床に転がる。

「panzer hindernis staerkung」

あのファングという小型機械が全方位攻撃が出来るかと踏んでパンツアーヒンダネスターカングでどうにか凌いで破壊するという対応を取る。

「そんなもんで防げると思ったら大間違いなんだよ！」

そう言っつて赤い機体は小型機械で私の周りを包囲して赤い魔力弾を全方位から乱射する。

「無駄よ、この防御魔法は鉄壁なんだから！」

「だったらこいつはどつだあー！」

魔力弾の雨が止み、今度は小型機械一つ一つから魔力刃が形成される。

(！？いけない！)

この防御魔法は魔力刃には対応しきれない！

「貫かれちまいなあ！！」

小型機械はさっきまで破れなかったバリアに穴を開け、ついにはバリアを破壊してしまう。

そして…

そのまま私の体を貫いていく。

「痛っ、ぐっ、あっ、ぐはっ！！」

全ての小型機械が私を貫いたところで、魔力刃を消して離れていく。

体が前に倒れそう。

でも、まだ倒れたくない。

「ちっ、しぶてえ嬢ちゃんだぜ。」

顔が機械だからか、舌打ちしているところから分からない。

まだ私は倒れてない。

もう立てないぐらいに傷付いたはずなのに…

もう死んでもおかしくないのに…

…痛くて悔しくて涙が溢れているのに。

何故かこの男を逃がしてはいけないと本能が告げている。

…男？彼は機械じゃないの？

でも、そんなことはどうでもいい。

倒せなくても、レリックは奪えなくても…せめて一撃だけは！

「やああああああ！…！」

盾を左手に持ち、奴に向かって殴り付ける。

頼む、これだけでも！

「いい加減くたばれよお、嬢ちゃん…！」

だが、奴は難なくシグを持った左腕を大剣で押し退けて、そのまま私の左腕を切り離す。

シグのコアも一緒に両断されてしまった。

「あああああああああああああああ！！！！！」

あまりの痛み私のもとは思えない絶叫をあげる。

「マ、マズダー…。」

シグのコアが真っ二つにされ、もはや管制人格も壊れてしまった。

…ごめんね、シグ。

「これで…あばよ、嬢ちゃん！」

次の瞬間、私は左胸から腰にかけて斬られてしまった。

ラーナを先に行かせてからというものの、ガジェットが次々と増援に
来ていた。

それでも、俺はなんとかほとんどのガジェットを倒した。

だが緊張を解いてしまい、背後に気が付かなかった。

「マスター、後ろです！」

「しまった！」

もう背後のガジェットは攻撃寸前、俺は咄嗟に防御に入ろうとする。

だが、ガジェットは攻撃するどころか真つ二つに分かれて爆発した。

爆発の向こうから人が現れる。

その女性はピンクのポニーテールで右手にデバイスらしき剣を持っ
ていた。

「戦闘中に気を抜くとは何事だ！」

「いや、悪かった。…あんだ、なのはが言ってたシグナムか？…っ
と失礼しました、シグナム二等空尉。」

「いや、今は気にするな。…そうか、お前が高町が言っていたディランディだな。…相方はどうした？」

シグナムも話が分かるな。…じゃなくて、早くラーナの所へ行かねえと！

「相方…ラーナはレリックを発見し、先に行かせてしまいました。」

「！まずいぞ、さっき報告で先の地点に行った魔導士の反応が消えていると来ている。」

おい、ラーナが危ないじゃねえか！

「くそっ！」

「おい待て、ディランディ！！！」

頼む、無事でいてくれ

ラーナ!!

俺とシグナムはラーナが向かったポイントへ向かっていた。

走りながらも段々と青ざめていく。

…近づくとつれ、少しずつ血の匂いがしてくるのだ。

「この嫌な匂い…まさか!」

シグナムも気付いたらしく、走る速度を上げていく。

俺の予感が当たってしまったかもしれない。

でも認めたくない。

そんなことはない。

頼む、生きて…生きていてくれ！

そう願いながら、現場に着いた。

そこには…

ラーナより前にここにいた陸士部隊の魔導士たちらしき死体と

真っ二つに割れたズウェーレシグと

全身血塗れで血だまりをつくっているラーナが仰向けに倒れていた。

俺の願いは叶うことはなかった…。

凄惨な光景にただ目を見開く俺とシグナム。

シグナムは悔しさで拳を強く握りしめる。

俺は慌ててラーナに近付いて彼女を抱き上げる。

夥しい血が俺のバリアジャケットに付くがそんなこと気にしてられない。

「あ、シグナム…さん、ニール。」

気が付いたラーナの顔は青ざめている。

彼女の体が何かに貫かれた痕があり、今でもそこから血が流れている。

これじゃ、助からねえ…。

「ラーナ…。」

俺は顔を青ざめながら、彼女の名前を呼ぶ。

「じ、めん、ね…レリック…取られちゃ、った。」

こんなにボロボロになっても言う彼女に涙が溢れてくる。

「そんなことはいい、早く治療を！」

分かっていても認められない俺はシグナムに対して言葉を荒げる。

それに対してシグナムは首を横に振るだけだった。

それがなお、彼女は助からないことを表す。

「ニール、最後になっちゃうから…聞いてくれる？」

そう言われて俺は溢れてくる涙を拭う。

「何だ？」

「貴方は罪を忘れてないけど、もう貴方は幸せになっても…いいんだよ？」

ラーナの血に濡れた手が俺の頬に触れる。

…ラーナはまさか、俺の気持ちに気付いていたのか？

「それと…私は…貴方のことが好きだったの。」

それはもう手遅れな愛の告白だった。

「もう…私は、ダメだけど…貴方は生きている。」

「ダメだなんて…言うなよ！」

涙がまだ流れてラーナの頬に落ちていく。

「私を困らせないで、ニール…。…最後のお願い、聞いてくれる？」

もう彼女の時間がないことを悟った俺は黙って頷く。

「キス、してくれる？」

それは彼女の最初で最後の願いだった。

「…分かった。」

そう言って俺はラーナとの唇を交わした。

… 苦い、苦い血の味がした。

そして、俺はラーナの唇から離れる。

「… 本当はこんな形でキスはしたくなかったけど… 仕方ない、よね。」

「ラーナ！」

「ニール… 幸せ… に、な、って…。」

彼女の右手が力無く地に降りていく。

そして

ラーナ・シールズは

この世を去った…。

「ライナ、ライナ…」

第7話 彼の願い…叶わず（後書き）

>名前<

ラーナ・シールズ

>性別<

女

>年齢<

17 18（享年）

>身長と体重<

167cm、44kg

>特徴<

髪は背中を覆う位に長く、またその髪は一本の三つ編みのお下げにして纏めている。

左利き。

>性格<

勝ち気で慌てんぼう。少し男嫌いの気があり、男性に対して厳しい。しかし、家庭的な部分があり、家事が出来る。母性本能に忠実なのか、可愛いものに弱い。

>デバイス名<

ズウェーレシグ

>階級<

三等陸士 一等陸士(殉職による二階級昇進)

エピソード 機動六課へ…（前書き）

この話で訓練編は完結です。

以後、ここは番外編を主に更新することにします。

続きである機動六課編は別途タイトルを変えて載せることにします。

エピソード　機動六課へ…

エピソード　機動六課へ…

雨が降りしきる中、俺は墓前の前に傘も指さずに立っていた。

その墓に刻まれている名前は

ラーナ・シールズ

訓練校の時から、1年間俺とコンビを組んでいた女性だ。

だが、彼女はジェイル・スカリエッティが作ったと思われるガジェットと一緒にいた、或いは指揮していた何者かによって殺された。

…彼女のことを好きだと気付いたのはあの悲劇が起こる前だった。

なのに俺は自分から告白することが出来なかった。

彼女を守ることが出来なかった。

そのことを後悔し続けながら、俺は死にもの狂いで武装隊としての任務をこなし、1年後に航空武装隊へと転属された。

あまりにも死にもの狂いでこなしたものだから、階級は三等陸士から空曹長へといつの間にか昇格していた。

あの悲劇の後の俺はガンダムマイスターだった時のように他人と上手く付き合いながらも、内心ではテロやジェイル・スカリエッティの一人に対する憎しみでいっぱいだった。

ラーナが言っていた「幸せになる」というのは、スカリエッティの一人を全員取っ捕まえてからだ。

だが以前だったら容赦なく殺すといっていたが、今はそんな気はさらさない。

多分、ラーナの願いを叶えるために殺すことを止めたがっているのかもしれない。

それでもアリー・アル・サーシエスだけは必ず殺すが…。

つてもう奴は死んだんだから言ってもしょうがねえ！

で今は航空武装隊に入って約一年経ち、三年前に一度会った八神はやてが設立する機動六課への転属命令が来ていた。

そこはロストロギアを保管したり回収したりする部署だ。

そしてなのは曰く、ロストロギア『レリック』の回収やスカリエツティの一団を捕まえるための部署という意味合いがあるとのことだ。

…今の俺にはお逃え（おあつらえ）向きだな。

「マスター、もう帰りましょう。あまりいると風邪をひいてしまいます。」

「ああ、そうだな。」

向かってくる敵は全員…

俺が

狙い撃つぜ!!

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
…

エピソード 機動六課へ…（後書き）

> オマケ <

このページではこの小説をより臨場感を感じながら読んでいただくために、こんな音楽を入れたらということを紹介します。

飽くまで私の思い付きなので、誰か案がある方は感想などに書き込んで見てください。

もしかすれば気に入るかもしれません。

但し、出来るだけ00かりりなのに関係あるものでお願いします。

それと私は00のBGM名は知っているのですが、りりなのの方が分かりません。

では、どうぞー！

・オープニング

りりなのSts1stオープニング『secret ambient

』no

・サーシエスside
00サントラ2『EXPECTATION』

・第七話のサーシエスvsラーナ
00サントラ2『SEIZURE』or『FORWARD』or
『UPROAR』『MORTIFY』

・第七話のニールとシグナムがラーナを発見したとき
00サントラ2『DESPAIR』

・第七話でラーナとの別れ 00サントラ2『REASON』or
『MEMORY』

・第一話〜第六話までのエンディング
リリなのSts1stエンディング『星空のスピカ』

・第七話エンディング
00ファーストシーズン2ndエンディング『フレンズ』orセ
カンドシーズン2ndエンディング『trust you』

番外編 1 俺たちの休日（前編）（前書き）

今回ののはニールたちが訓練校時代にあった休日の一時を描いています。

本当はもっと長くしようと思いましたが、それでは短編にならないので前編・後編に分けました。

因みにあのキャラたちが友情出演（？）しています。

誰なのかは後書きで。

私のちょっとした遊び心なので、突っ込みはなしでお願いします。

番外編 1 俺たちの休日（前編）

番外編 1 俺たちの休日

訓練校で魔法の訓練に明け暮れているある日の休日。

ラーナはスバル、ティアナと外で遊びに行くということで彼女たちの部屋へ行った。

俺は何かする気になれずにほとんど部屋で寝ることにした。

「マスター、あまり外へ出ないのはどうかと思えますよ？」

「悪いな、今日は溜まった疲れを取りたいんだよ。」

「だからこそ、外で気分転換するのが宜しいのではないですか？」

とデュナメスに怒られながら寝ていたら自動ドアが開いた。

「ニールさん、今暇ですか？」

部屋に入ってきたのはスバルだった。

「ああ、今日はちょっと疲れが溜まっちゃまってから寝るつもりだ。」

「

「ダメですよ、せつかくの休みなのに勿体ないですよ。だから、一緒に外へ行きましょう!!」

で俺の腕を掴んで引つ張り始めた。

ていうか何てパワーしてんだよ!

「分かった、分かったから引つ張るな!落ちるから、落ちるってどわっ!」

「わあっ!」

俺はベッドから落ちて額を打つ。

「痛つつ、大丈夫…か?」

「あ…あの…。」

え、どうなっているかということ…

俺がスバルに覆い被さってる状態になっている

ということだ。

「…すぐに退く。」

とここで謀ったように自動ドアの扉が開く。

「ちょっと、スバル！あんたはいつまで時間を掛け…て。」

「どづしたの、ティ…ア？」

やっべえ…。

「ふ、二人とも、誤解だ！」

慌てて弁解するも、二人は既に俺を睨んでる。特にラーナの目付きがティアナより恐い。

「見損なつたわ、この…変態！」

「ごかぶへっ！」

ラーナの鉄拳が俺の顔にクリーンヒットし、俺は気絶した。

り…理不尽…だ。

意識が覚醒すると、ラーナが突然謝ってきて、その横でティアナとデュナメスがスバルに説教をしていた。

どうやら、スバルとデュナメスがちゃんと弁解してくれたようだ。

…まだラーナに殴られた頬が痛い。

「しっかしラーナのパンチはすっげえ痛えな。」

「。…っ。」

まあ、反省してるからもういいだろう。

「で、ミッドチルダの何処へ行くんだ？」

「行ってくれるの！？わーい！！」

どっちにしろ、断れなさそうだな。

「ははは…。」

「すみません、ニールさん。このバカの我が儘に付き合わせてしま
つて。」

「いえ、今のマスターには丁度いいです。」

声がフェルトと同じだが、性格は随分違うな。

「いいえ。せつかくだから俺も楽しませてもらっせ。」

「因みにお昼はニールが払ってね。」

…楽しめるのか、俺。

そもそもスバル、どこ行くか教えてくれ。

ミッドチルダ東部

この区域は色々と遊んだり買い物などが出来る場所となっている。

今回はスバル、ティアナ、ラーナの三人と共にやって来た。

ただ、何だか周りから見られているようだが気のせい…じゃないな。

一部、男から殺気のこもった視線を受けている。

そりゃそうだな。三人の女の子と一緒にいればプレイボーイとかで捉えられても仕方ないよな…。

「マスター、周りから…。」

>知っている。はあ…<

今の状況を半ば嘆いているところで前方でスバルと同じ青い色の長い髪を揺らしながらこっちに手を振る女性がいた。

「スバル。」

スバルは前を見るな否や彼女の方へ駆け出していく。

「ギン姉〜!」

二人とも互いの手を取って再会を喜びあう。

…というよりちょっとした組み手をやっている。

こっちに気が付いた女性が俺たちの方を向く。

「初めまして、スバルの姉のギンガ・ナカジマといいます。妹がお世話になってます。」

「あ、はい、初めまして。ティアナ・ランスターです。」

「初めまして、私の名前はラーナ・シールズです。」

「ティアナさんとラーナさんですね、宜しく願います。でそちらの男性はどなたですか？」

「初めまして、俺の名前はニール・ディランディだ。それと別に敬語じゃなくてもいいぞ。あとは別に呼び捨てでも構わない。」

「あの敬語は私の場合は地も入っているんですよ。それと貴方のことはニールさんと呼ばせてもらいますね。」

まあ、こればかりは人それぞれだからいいか。

挨拶が終わったところで、スバルはラーナと一緒に食べ歩き、俺とギンガとティアナはベンチに座っていた。

ギンガとティアナは同じベンチで、俺は二人の隣にあるベンチに座る。

「ごめんなさいね、ティアナさん、ニールさん。あの子の我が儘に付き合わせてしまっ...。」

「いいえ。」

「いや、気にしないでくれ。」

ティアナは首を横に振りながら、俺は手を軽く振りながら答える。

「…スバルから大体のことは聞きましたか？」

「はい。スバルやギンガさんのご家族のこととか、何で管理局に入ろうとしたのかも聞きました。しかし、聞いた時は驚きましたよ。たった一年ぐらいで訓練校に入ったって言ってましたから。」

「…そうですか。スバルが突然、管理局に入ると言い出した時は私とお父さんも驚きましたよ。スバルは一度言い出したら聞かないから、大急ぎで色々と教えたんですよ。」

なるほど、スバルのわがままは家族にも発生するんだな。

朝の事件が目につかぶ。

ティアナも同じことをおもっているのか、げんなりとした表情を見せている。

…相当スバルに振り回されているんだな。

「それで、ティアナさんのご両親はどうなんですか？」

「…両親は物心ついた時には既に亡くなって、兄がいたのですがその兄も任務中に亡くなりました。」

「ごめんなさい。」

ギンガが謝るが、ティアナは両手を振って気にしないように言う。

…こいつらも辛い目に遭っているんだな。

「ニールさんはご両親とかは？」

なら俺も腹を割って話すのでしょうか。

「それを言う前に聞いてほしいんだが、俺はこの世界の人間じゃない。管理局で言う次元漂流者だ。」

「えっ!？」

「そ、そうなんですか!？」

ティアナもギンガも驚いて俺を見る。

俺は予想していたので、そのまま話を続ける。

「俺は地球出身だが、並行世界にある地球からこっちに飛ばされた。」

「それで、ご家族は？」

ティアナがギンガと同じ質問をする。

「家族は父さんに母さん、妹に双子の弟がいる。∴弟以外は全員俺が10歳ぐらいの時に亡くなったがな。」

「そんな…。」

正確には殺されただが、そこまでの話をする必要はない。

「じゃあ、ニールはあっちでは何をしていたんですか？」

「…狩人だな。銃で動き回る鹿とか猪とかを狙い撃ってそれで生計を立てていた。言っておくが、密猟はやってないぞ。」

本当はスナイパーでC Bのガンダムマイスターだったが、それは附せておく。

「だから射撃に自信あるって言ってたんですね。」

とはいえ魔導士の射撃は俺がやってきたことと違っていたがな。

「まあ、そうだな。」

なんとか誤魔化せたか。

「…あれ、もうお昼になってる。そろそろどこかレストランで食べましょう。」

「そうだな。スバルとラーナと合流しよう。」

俺たち三人はベンチから立ち、スバルとラーナのいる所へ向かった。

ラーナ side

今、私はスバルと一緒に散歩…いや、スバルの食べ歩きに付き合わ
されていた。

「ねえ、スバル。」

眉間に皺の寄った私。

「何、ラーナさん。」

前を歩きながら、後ろの私に顔を向けるスバル。

「貴女、アイスクリームいくつ頼んでるの?」

そして…スバルの手にはコーンの上に何重にも重なったアイスクリ
ームがこれでもかと乗せられている。

数はざっと6個、全て…私のお金で買ったものである。

「あたし、大体はこんな感じだよ？」

それを聞いた私は内心、張り倒そうかと思っていた。

その前に、そんなデフォルト要らないわよ!!

「貴女に遠慮するなど言ったことを後悔してるわ…。」

頂垂れる私。

もう、アイスクリーム程度のはずが思わぬ出費になってしまった。

そんな私の話を聞いてないのか、スバルは先に歩いて行ってしまった。

ギンガ：貴女も苦労してるのね。

とはいえ、スバルも苦労している所もあるのだろうか。

「ラーナさん、こっち来てよ。」

あの元気いっぱいの笑顔を見ているとそんな気がしなくなる。

「ラーナさ〜ん、スバル〜、お昼にするのでこっちに来てください。」

後ろからギンガが私たちを呼ぶ声が聞こえて、そっちへ向かう。

俺たちは繁華街にあるレストランに入った。

名前は『アーネンエルベ』という。

今は人がたくさんいて、俺たちはギリギリで全員座れた。

「先に言っておくが、今日は俺の奢りだ。」

実は1ヶ月間、訓練だけでなく簡単なアルバイトもやっていた。

喫茶店の接客をやっていた。

…なんか店長が俺がいる間は女性客が多いと言われたことがあった。

「…あの、他の女性のお客さんの視線が痛いのですが…。」

ギンガが困った表情で向かいにいるティアナに話しかける。

「ギンガさんもですか？実は私もそう思っていました。」

ティアナも小声で訴えかける。

そこにオレンジ色の髪で頭のとっぺんにアホ毛の付いた女の子が近付いてきた。

「ご注文はお決まりになりましたか？」

するとスバルがメニューを手に取り、ページをめくって見せる。

「あの…この店でパイが美味しいって聞いたことがあるのですが…。」

「あ、はい。この店では店長が焼くパイがオススメなんですよ？」

そこはかたくなく嫌な予感が…。

「じゃあ、このパイ全種類一つずつで。」

全種類って…10種類全部かよ！

「へっ、あ、はい。チカちゃん、ちょっと店長に用意出来るか聞いてきて。」

チカちゃんと呼ばれた緑色のツインテールの女の子がこつちを振り返る。

「わ、分かった。」

チカちゃんと呼ばれた女の子が店の奥に引っ込む。

ティアナが目が据わった恐い表情でスバルを見る。

「スバル、少しは遠慮しなさい。それにあなたはさっきアイス沢山食べたでしょ。」

「だって食べたかったんだもん…。」

スバルの隣に座ってるラーナを見ると、楽しそうにさっき注文したパイのページを見ている。

「でも、私もパイがどんなのか気になるわ。」

…相棒の『ビンボークジ、ビンボークジ』という声が聞こえてくる
ようだ。

「マスター、本当に損な性格をしていますね。」

>ほっといてくれ…。<

ギンガを見たら彼女もパイを食べるのが楽しみなようだ。

…そんな楽しみな顔されたら断れねえじゃねえか。

お昼を食べ終わり、店を出る。

t o b e c o n t i n u e .

.

番外編 1 俺たちの休日（前編）（後書き）

答えはTYPE・MOONの携帯サイト「魔法使いの箱」のひびちかです。

関係ないじゃんという突っ込みはなしで。

…それにしても、緑って本当に接客下手で…！？

ニール「狙い撃つぜ！」

げはっ、ま…まさかの狙い撃ち…ガクッ…。

ニール「こちらフォレストグリーン、目標の狙撃に成功した。」

ちか「ご苦労、撤退していいぞ。…ったく、アホ作者に言われたくないんだよ！」

番外編 1 俺たちの休日（後編）（前書き）

半月ほどお待たせしてすみませんでした！

最近、色々と忙しくなってきたせいであまり小説に手を出せませんでした。

今回も前回の関連でゲストが登場しています。

番外編 1 俺たちの休日（後編）

結局、パイ尽くしにギンガがまさかのデザート注文をやってくれたお蔭で一氣に円で換算するなら、100000円を軽く越す金額になってしまった。

ティアナだけはパイで十分だということで遠慮してくれた。

…皆、容赦ねえ…。

で今はデパートでショッピングだ。また二手に別れ、今度はラーナと二人になる。

なのだが…

「何で…ランジェリーショップに俺まで？」

いや、いくら何でも俺がいるのはまずいだろ？

もう…冷や汗がダクダク出ている。

「だって…ニールに選んでもらいたくて…」

上目遣いで涙目で俺を見てくる。子犬の耳や尻尾が付いているという幻覚が見える。

あれ、ラーナってこんなに可愛げあつたっけ？

しかし、他の客の生暖かい視線が気になる。

もうこうなったらヤケだ！

「分かった分かった、俺なら一番は赤だが…ラーナは水色とかの方が似合う気がするな。」

これは適当じゃなくて直感だ。

因みに他の客はそれを聞いて「赤だなんて、嫌だもつ…」「バカツプルの言うことだけど、あんなカッコいい人に言われたら私…抵抗出来ないかも…」「その女じゃなくて私に…！」と各々が想像を膨らませている。

店員の中には涎を垂らしている人までいる。

…ちょっと危機感を覚えてきた。

「ラーナ、試着してこい。俺は今から車を見てくる。集合場所にいなかったら、そこにいるから買ったら来てくれ。」

「え、ええ、分かったわ。」

そう言っつて俺は急いでその場を離れた。

ふう…危ねえ危ねえ。

俺はランジェリーショップを出てカーショップにやって来た。

デパート内にあるため、車は二台しかない。

展示してある車はどちらもミッドチルダの最新モデルで、電動で静かに走れるというものだ。

ただ、静かに走れるということは逆に言えば耳の感覚を頼りに動く視覚障害者にとっては音の出所が分からず危険という欠点があるが、どちらの車もカッコいいが、やっぱり俺が乗り回していた愛車の方がいい。

「はあはあ…ニール、やっぱりここにいたんだね。」

とそこにラーナが息を切らせてやって来た。

「走らなくなつて俺はまだここに居るつもりだつたんだぜ？」

「すれ違いなんて嫌だつたから…。それでニールって車好きなの？」

ラーナは俺の横に来て展示されている車を見る。

「ああ、そこまでという訳じゃねえが好きだな。愛車も持ってたし。」

因みに愛車の名前はランチア・ストラトスという外見は白に緑のラインが入っている。

「…ニールと一緒にいたらドライブでも…。」

「何か言つたか？」

ラーナが何か呟いていたが、聞こえず聞いてみる。

「い、いえ、何でもないわよ。」

顔を赤くして手を振りながら本当に何でもないと彼女はアピールしてくる。

「はは、そうか。」

「何で笑うのよ!」

ラーナ、頬を膨らませてそっぽを向いてしまう。

照れているみたいだから、少しからかってみるか。

「金を稼いだら、地球でランチア・ストラトスを買おうかと思っている。」

正確には、俺が愛車にしていたのはランチア・ラリー037のレプリカモデルだ。

もしかしたら、こっちの地球にもあるかもしれない。

「それ本当!?その時は私も乗せてって…あ。」

…俺もビククリするぐらいの食い付き振りを見せてきた。

その目は輝いていて、それもキスが出来そうなくらいの至近距離だ。
あまりにも可笑しい。

「あっはははははははははははは。」

「ち、ちよつと大笑いしないでよ。恥ずかしいじゃない…。」

ラーナは羞恥心で顔を真っ赤にして俯いてしまった。

…男性の店員の方を見ると、「そんなところでイチヤつくんじゃねえ！」と言わんばかりにこつちを睨み付けていた。

「…そろそろ行くっぜ。」

俺たちは店員に注意される前に店を出た。

集合場所に着いた俺たちだったが、まだ誰も来てない。

「ちっと早かったか？」

「いいえ、もう時間が過ぎてます。」

そういや、スバルが「ギン姉と一緒にティアナをコーディネートするんだ！」と意気込んで言っていたな。

…ティアナが着せ替え人形にされているのが目に見える。

ドンマイだ、ティアナ…。

シリシリリン…！

「あれ、こんな所に携帯が…。」

見ると木製のベンチに青い携帯電話が大分昔の電話のような音を鳴らしてその存在を訴えかけている。

しかも、折り畳み式になっているが何故か開きっぱなしで液晶画面

が光っている。

「HEY、その成層圏を狙い撃つ男さん、女四人連れてハーレムですかい！羨ましいねえ、憎いねえコンチクショウめえ！更に今からそのどこの革新者似の女とラブホでバカンイヤンなことを…
つてあの…すみません、目付きがメチャクチャ怖いのですが…。」

多分、今の俺は無表情だろう。こついうはた迷惑なイタ電は折って
処分するに限る。

「ラーナ、ちよつとこの携帯をあそこのゴミ箱に捨ててくる。」

「ええ、行ってらっしゃい。」

ラーナの氷のような冷たい声で指示を聞いて無言でゴミ箱へと歩く。

歩く途中でメキッ、バキッという音がしたが気にしない。

「えつと…あの…すみません、ヒンジはそれ以上曲がらな…つてわ
ああああ、折れてる折れてるつうつう！しかも貴方の弟さんばりに
扱いが酷くダストシュート！？ダストシュートは止めてください、
ロリッコン・シヨタラトスつがふつ…。」

俺はその携帯らしきものをゴミ箱に投げ捨てる。

それでもゴミ箱からギャアギャアと煩いが放っておく。

数分後に三人がやって来た。

ギンガ曰く、ティアナが着せ替え人形にされた仕返しにスバルにも同じことをさせたらしい。

ただし、スバル本人も楽しんでいた為にあまり仕返しになっていなかったとのことだ。

その証拠にティアナがげんなりと頂垂れながらスバルを睨んでいる。

「ああ、楽しかった。」

「楽しかったのはあんただけでしょ…。」

ティアナ、そういう時もある…。

考えてみりゃ、こつやって誰かと一緒に遊んだりしたのは久しぶりだな。

皆、忙しくてクロノなんかは本当に毎日暇がないと本人から聞いている。

あつちにいた時はマイスターもトレミークルーとも買い物はしても遊んだりすることは殆んどなかった。

「あ、そろそろ帰らないと…。」

ギンガがデパート内にある時刻を見て呟く。

「アタシたちも帰ろう、ティア。」

「そうね、疲れちゃったし帰りましょう。」

そう言つて三人とも帰ろうとするが、ラーナ何か言いたそうに俺を見ってくる。

>ラーナ、何か言いたいことがあるのか？<

念のために念話で聞いてみる。

> ええ。ニールと二人つきりで…私のことを話したいの。 <

真剣な、それでいて哀しそうな表情で俺を見る。

> 分かった。 <

無論、それを断るはずもなく了承する。

「皆、すまねえが俺とラーナはもう少しいる。先に帰っていてくれ。」

「分かりました。ですが、あまり遅くならないうちに戻ってきて下さいね。スバル、行こう。」

そう言つてスバル、ティアナ、ギンガは先にそれぞれの場所へ帰つていった。

ラーナに連れられて公園にやってきた。

夕闇に染まる空、オレンジとブルーとネイビーのコントラストがなんと鮮やかだ。

「…何でここに？」

ふと疑問に思い誘った本人に聞いてみる。

「あまり他人に聞かれたくないし、この時間帯ならここには人は来ないから。」

声を震わせながら振り向くラーナ。

その表情には悲哀と懐かしさと複雑な思いが込められているように見える。

「もしかして、ここに住んでいたことがあるのか？」

無言で頷くラーナ。

そして、いつもの勝ち気な雰囲気は更になりを潜めていく。

「ニールに家族がいたように私にも両親がいたの。両親共に優しく
て幸せだったわ…。」

夜空を見上げながら語り始めるラーナ。

そして、突然ズウェーレシグをセットアップして武器を出す。

「お母さんは主婦でお父さんは時空管理局員だった。でも…お父さんは小さい時に殉職、私が持っている盾と似た盾で仲間を庇って守りきれたけどお父さん自身は自分の身を守りきれなかった。つまりシグは、お父さんの盾を元にして改良されたデバイス。」

なるほど、毎日大事にズウェーレシグを磨いていたのはある意味じや父の形見だからか。

「なら、母親はどうしたんだ？」

それを聞いた途端、ラーナの目に涙が溢れていった。

「お母さんはお父さんが亡くなった後に女手一つで働いていたけど、突然どこの誰だか分からない男に…！」

涙が頬を伝う。

「お母さんを殺した犯人は男だと分かったけど、今でも捕まってないわ。」

正直、本人にこんなこと喋らせて良かったのか…。

だが本人から言っていることを俺が止めることは出来ない。

「その後は、親戚もない私は一人で生きてきた。生きる為に色々なことをやったわ。言っておくけど、盗みとかはやってないわ。コンビ組んでて分かったでしょ？」

確かにお世辞にも足が速いなんて到底言えないくらい遅かった。

「本当に、色々なことをやったわ…。」

悲哀と共に自嘲する笑みを浮かべた。

そこで俺は察してしまった。

「ラーナ、まさか…。」

「ニールの思った通りよ。私は…汚れているのよ。」

自然にギリツと歯を噛み締める。

ラーナに対してじゃない、ラーナにこんなことをさせてしまった周りに対しての怒りだ。

そういうことをしてきたのなら、男嫌いになって当然だ！

「ねえ、こんな私でも一緒に戦ってくれる？一緒に居てくれる？」

…決まっている。

「勿論だ。過去がどうかじゃない、ラーナが頑張るといふなら俺は応援する。それとありがとう、辛かっただろ。今は泣いてもいい、誰も見てねえからな。」

そう言って俺は微笑みながらラーナの頭を撫でる。

「うっ、うっ、うっ……うわああああああああああ……」。

俺は黙って抱きついてきたラーナを受け止める。

空には満面の星空が輝いていて綺麗だった。

ラーナ s i d e

今まで出そうにも出せなかった感情。

それが漸く出すことが出来た。

本当に辛かった…。

ミゼットというお婆さんに拾われなかったら今頃は同じ自分を大事にしない生活を続けていた。

そして、今泣きじゃくる私を受け止めている男…ニール・ディランデイのお蔭で胸の中に閉まっていたものを解き放つことが出来た。

でも、本当に不思議な人…。

今まで男に触られるのは嫌がるか何ともないだったのに、ニールだけはドキドキしてしまう。

ニールともっと一緒に居たいと思ってしまう。

ニールのことをもっと知りたいと思ってしまう。

もうすっかりバタ惚れしてしまったのね、私。

もうニール以外は考えられないわ。

「もう…良いわニール。」

「良いって、俺たちはコンビだろ？」

ニールの方はそのつもりはないみたいだけど、絶対に振り向かせるわ！

それと…

「ありがとう、ニール。」

涙でグシャグシャだけど笑顔でお礼を言った。

「もう大丈夫みてえだな。帰ろうぜ、もう行かねえと大変だ。」

そう言われて何となく見上げた星空がまるで祝福するかのようキラキラと夜空を彩っていた。

番外編 1 俺たちの休日（後編）（後書き）

話を見ての通り、ラーナ中心にしてみました。

元々そういう計画でしたので悪しからず。

それとニールの愛車の名前はあれで大丈夫なんでしょうか？

ちょっと不安がありますので、どなたか合っているかどうか言ってくださると助かります。

サーシエスsideストーリー1 暴虐せし傭兵（前書き）

また久々になってしまいました、お待たせしてすみませんでした。

今回はタイトル通り、サーシエス中心になります。

もしかするとサーシエスの性格と離れてしまっているかもしれませ
ん。

あと、暴力的な内容も含まますのでご注意ください。

後書きにサーシエスの設定を書かせていただきました。

サーシエス side ストーリー 1 暴虐せし傭兵

今の大将に雇われてから半年、俺は盾を武器にする珍しい嬢ちゃんを殺してからもあちこちの世界へ行つては色んなものを殺して回った。

人は勿論、でつかい虫や人なのか魚なのか分からねえもんとか果てには俺が乗つてたガンダムよりでえ化け物まで殺したぜ。

だがでえ化け物の方だけはマジで死ぬかと思つたがな。

で今は大将から嬢ちゃんたちを鍛えてくれということで模擬戦とやらをやっている。

「アリー兄、嬢ちゃんたちじゃなくてセインと…」

「ウエンディと…」

「ノーヴェだ！」

突っ込んでくるノーヴェの嬢ちゃんのパンチを横から手首を掴んで

放り投げる。

因みに嬢ちゃんたちの武装がまだ完成してねえから、だからって俺のデバイスを使ったら相手にもならねえってことで素手での格闘の訓練って訳だ。

…はつきり言っつてつまんねえ。

次に来たウエンデイの嬢ちゃんの攻撃をヒョイヒョイ避けながら俺はやる気なく相手している。

「捕まえた！」

とそこで床からセインの嬢ちゃんが飛び出してきた。

以前、同じ手をやられていた俺は易々と横に避けた。

「読めてるぜ、嬢ちゃん！」

そのまま俺の足を掴もうとした手を逆に掴み、引っ張り出す。

「わ、わああああ！」

「え、セインの攻撃をあっさり避け…っつてこっちに投げないでへう

っ！」

更にウエンデイの嬢ちゃんに向けて投げた。

案の定、二人は抵抗出来ずにぶつかり合った。

「セイン姉、ウエンデイ！」

すかさず俺はノーヴェの嬢ちゃんを組み伏せる。

「おいおい、もうおしまいだよ。これじゃ全然盛り上がりねえ。」

心底つまらないと睨みながら訴えてみるが、ノーヴェの嬢ちゃんは睨み返してくる。

「ううー、そんなこと言われてもサーちゃんは強すぎるッス。」

ウエンデイの嬢ちゃんが頭を擦りながら泣き言を言う。

っていつかその呼び方は止める。

「それにしてもアリー兄、避けるの早いよ。」

セインの嬢ちゃんも起き上がって不満気に言ってくる。

「言っただろ、あんなの何度も喰らうかって。もう一度俺を捕まえなきゃ、自分で考えろ。」

そんな教えてくれなんて目で訴えたって教えねえよ。

「「サーちゃんのケチ!」」

セイン、ウエンディの二人の嬢ちゃんが謀ったように同時に訴えてくる。

「その呼び方は止める。」

言ってもそっぽを向く。

ダメだ、直さねえ気だ…。

大将との契約もあって力で黙らせるのはまずい。

いくら俺でも嬢ちゃんたち全員を敵に回すのはきつい。

「ていうか、何でこのオッサンのことサーちゃんなんて呼ぶんだよ。」

そつだ、言つてやれノーヴェの嬢ちゃん！

「え、理由なんて無いよ。」

「ああ、そつ。。。」

そつ言つてノーヴェは説得を諦める。

「セイン、ノーヴェ、ウエンディ、ドクターが呼んでるわよ。」

そこにクアットロの嬢ちゃんが訓練室に入ってくる。

俺を見た途端、睨み付けてくる。

…前々から思つていたが、あの嬢ちゃんは俺のことが気に入らないようだ。

俺の顔を見る度に睨み付けてくる。

さつき相手していた嬢ちゃんたちがいなくなり、眼鏡をかけ直して

俺に顔を向けてくる。

「…言っておきますが、アンタのことは認めないわよ！何でこんな野蠻そうな男をドクターは入れたのかしら？それに、トーレ姉様が負けたなんて信じられません！魔力で劣っているのに…。」

…いつちょ、黙らせるか…。

「おい。」

「何を一体…って、きゃあ！」

俺の顔を見た途端に嬢ちゃんの顔が青ざめ、更にその顔を殴り付けて壁に追いやる。

「いいのかよ、そんなナメた口聞いてよお。…嬢ちゃん一人殺すくらい訳ねえんだぜ？」

咄嗟に取り出したナイフを首筋に当てる。

「こ、こんなことしてドクターたちが黙っていると…。」

おーおー、声が震えちゃってるぜ？

可愛そうに…怖いオジサンに脅されて怯えちゃまってっな。

「へっ、言い訳ぐらいいくらでも立つんだよ！それとも…殺す代わりに、犯してやろうか？」

それを聞いた嬢ちゃんの顔が恐怖に歪む。

「そ、それだけは止めて…。」

多分、今の俺はあまりに愉快でにやけているだろうな。

この高慢な態度をした女を恐怖に陥れたのが、マジで最高だ。

「なら、こっぴつ時はごめんなさいと謝るのが常識だよなあ！そう
だろ、嬢ちゃん。」

嬢ちゃんが頷いたところで、ナイフの刃先を首筋から離してやる。

「…じめん、なさい。」

頭を下げて俺に謝ってくる。

「…次言った時はズドン、と撃たれちまってるかもしれないねえから気を付けるよ。」

背を向けて、着替えるために自分の部屋へ戻っていった。

後ろから、パタンと嬢ちゃんがへたり込む音が聞こえたが振り返らない。

…所詮は嬢ちゃんか、大したことねえなあ。

クアットロside

何なの、あの男！

いきなり現れたかと思えば、いきなりトーレ姉様を負かして…その上、何故か知らないけど他の娘たちに人気だし…！

ドクターもあの男に他の娘の何人かの教導を手伝わせるぐらいに信頼しちゃっているし!!

これでは計画が狂ってしまうかもしれない…。

そう思ってセインたちの呼び出しを口実にアリー・アル・サーシェスに文句を言ってみた。

けれど…

突然殴られ、壁に叩き付けられて、首にナイフを突きつけてきて…。

その時のあの男の表情は愉快そうに…でも本気で殺すことが出来ると解るぐらいに邪悪な笑みを浮かべていた。

その表情を見て理解してしまった…

こいつは人を殺すなんて訳ないんだと…。

犯すなんて言われて謝ったけど、実際はこいつはそれよりも殺したがつているのが解る。

そう思ったら怖くて堪らずに命乞いをしていた…。

こんな屈辱は初めてよ…！

いつか隙を突いて殺してやる！！

そうして生まれて初めて憎悪という感情を持った私はあの男が去った自動ドアを睨み続けていた。

サーシエス side ストーリー 1 暴虐せし傭兵（後書き）

すみません、デバイスの設定は次にします。

>名前<

アリー・アル・サーシエス

>性別<

男

>年齢<

36 (1st) 40 (2nd)

>性格<

残忍、狡猾、少し茶目つけがある、戦争中毒

>備考<

元・クルジスのテロ組織「KPSA」のリーダー、そして戦争を好み他者を殺すことを躊躇わない傭兵。

刹那をKPSAに引き入れた張本人であり、後にロツクオン・ストラトスとなるニールとライルの家族をテロで巻き込んだ犯人でもある。

その戦闘力は培われた経験もあり、リボンスに「彼はある意味、人間を超越している。」と謂わしめるぐらいにずば抜けている。

特に白兵戦など近接戦闘が得意で、2対1でもヒケを取らなかった

ぐらい。

しかし、途中から刹那に圧倒されたり、1stではニールに勝ったものの体の半分を消し炭に、2ndではライルに負けて撃ち殺されたりと刹那やロックオン二人に辛酸を舐めさせられることになる。

因みに暇なときはウイスキーなどの酒を飲んでいる。

>サーシエスの殺人リスト<

・ライル以外のディランディ家（ライルに逆に殺される）

・絹枝〓クロスロード

・ラグナ〓ハーヴェイ

・ヨハン〓トリニティ

・ミハエル〓トリニティ

・ラーナ〓シールズ（リリなの×00オリジナル）

・テロ組織、傭兵で殺したりリリなの世界の魔導師と一般人含むその他大勢

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5007i/>

魔法少女リリカルなのは～天を穿つ深緑の狙撃手～

2011年6月10日07時05分発行